貝塚市埋蔵文化財調査報告第23集

沢西遺跡発掘調査概要

1992.3

貝塚市教育委員会

はじめに

沢西遺跡は、見出川右岸に位置し、今回新たに発見した遺跡であります。

沢地域はこれまでの調査にて、古くより人々の生活の場として栄えた地であることが明らかになりつつあります。弥生時代に集落が出現し、平安時代、中世においては大きな集落が広がり、以後現在に至っています。

今回、本遺跡の歴史の一端を明らかにする機会に恵まれ、また本調査概要報告書として刊行するはこびとなりましたことは、過去の人々の暮らしを明らかにすることにおいて有意義なことと考えます。

本書刊行にあたりまして、皆様の文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護、保存、研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、関係者各位には多大なご理解、ご協力を頂き、末筆ではありますがここに深く感謝の意を表します。

貝塚市教育委員会
教育長　岡　根　和　雄

例　　言

1．本書は、㈱ヤシマの依頼により、大阪府貝塚市沢220他におい実施した、情報処理施設建設工事に伴う事前発掘調査の概要報告である。

2．調査は、確認調査を平成２年８月６日から８月10日にかけて、本格的調査を第１区は同９月21日から11月21日に駆けて、第２区は同11月13日から12月27日にかけて実施した。
　なお、内業調査については、平成３年６月29日に終了した。

3．調査にあたっては㈱ヤシマより多大なご理解とご協力を賜った。また、現地調査については岩出建設㈱の手を煩わせた。ここに記して感謝の意を表す。

4．発掘調査は貝塚市教育委員会社会教育課学芸員前川浩一、三浦　基が担当した。
　現地調査および本書作成にあたる諸作業については、下記の諸氏の参加を得て実施したものである。

楪佐枝子	上野　元	上東　束	奥谷　隆	清水久子	下中良仁
田代自子	田渕広巳	中辻澄子	宝満哲也	藤井記代美	八尾朋良
森村紀代					

5．本書の編集は前川が行った。執筆は目次に示した通り、前川、三浦が行った。
6．遺物写真撮影は前川が行った。

7．出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会において保管している。

8．調査、整理等にあたっては次の方々のご教示を得た。記して感謝の意を表す。（敬称略）
　坪之内徹（奈良女子大学）
　森村健一（堺市立埋蔵文化財センター）

目　　次

はじめに
例　言
目　次

第 1 章　調査に至る経過　(前川) …… 1
第 2 章　位置と環境　(前川) …… 3
第 3 章　調査成果　…… 5
　第 1 節　調査の概要　(前川) …… 5
　第 2 節　基本層序　(三浦) …… 5
　第 3 節　検出遺構　…… 11
　　1.　第1区　(三浦) …… 11
　　2.　第2区　(前川) …… 24
　第 4 節　出土遺物
　　1.　第1区　(三浦) …… 30
　　2.　第2区　(前川) …… 37
第 4 章　ま と め　(前川) …… 47

図 版 目 次

図版１　　第１区遺構
　第１区全景
図版２　　第２区遺構
　第２区全景
図版３　　第１区遺構
　１．第１区北部
　２．第１区南部
図版４　　第１区遺構
　１．SD―１
　２．同　上
図版５　　第１区遺構
　１．SB―１
　２．同　上
図版６　　第１区遺構
　１．SK―１、SK―２、SK―３、SK―４
　２．同　上
図版７　　第２区遺構
　１．第２区全景
　２．同　上
図版８　　第２区遺構
　１．SD―238
　２．同　上
図版９　　第２区遺構
　１．SD―201・202及び周辺
　２．同　上
図版10　　第２区遺構
　１．SD―241 及び周辺
　２．SD―246・247・252
図版11　　第1区出土遺物
　青磁（３、５）、漁撈具（９～12、14、16、17）
図版12　　第１区出土遺物
　石器（50、51、52）
図版13　　第２区出土遺物
　SD―238（53～55）、包含層第３層（77、101、108）
図版14　　第２区出土遺物
　包含層第４層（119）、包含層第３層（116～118、121、122）機械掘削時（120、127）

挿図目次

図	1	貝塚市遺跡分布図	2
図	2	調査地位置図	3
図	3	調査地概略図	4
図	4	調査地地区割図	6
図	5	調査地土層概略図	7～8
図	6	遺構配置図	9～10
図	7	ＳＤ－１　平面図及び断面図	13～14
図	8	ＳＢ－１　平面図及び断面図	15～16
図	9	ＳＫ－１．－２．－４　平面図及び断面図	17～18
図	10	第２区　遺構配置図（黒褐色系埋土）	25～26
図	11	第２区　遺構配置図（淡灰色系埋土）	27～28
図	12	青　　磁	31
図	13	漁　撈　具	32
図	14	SK—1(18—22)、SK—2(23)、SK—3(24)、SD—1(27)、SD—20(26)、Pit—2(25)、SX—4(28) 出土土器	33
図	15	包含層第３層出土土器	34
図	16	石　器	35
図	17	石　器	36
図	18	SD—238 出土土器	38
図	19	SD—241 (58)、SD—243 (59)、包含層第４層 (60～62) 出土土器	39
図	20	包含層第３層出土土器	40
図	21	包含層第３層出土遺物	41
図	22	包含層第３層出土遺物	42
図	23	陶磁器	43
図	24	石　器	44

第１章　調査に至る経過

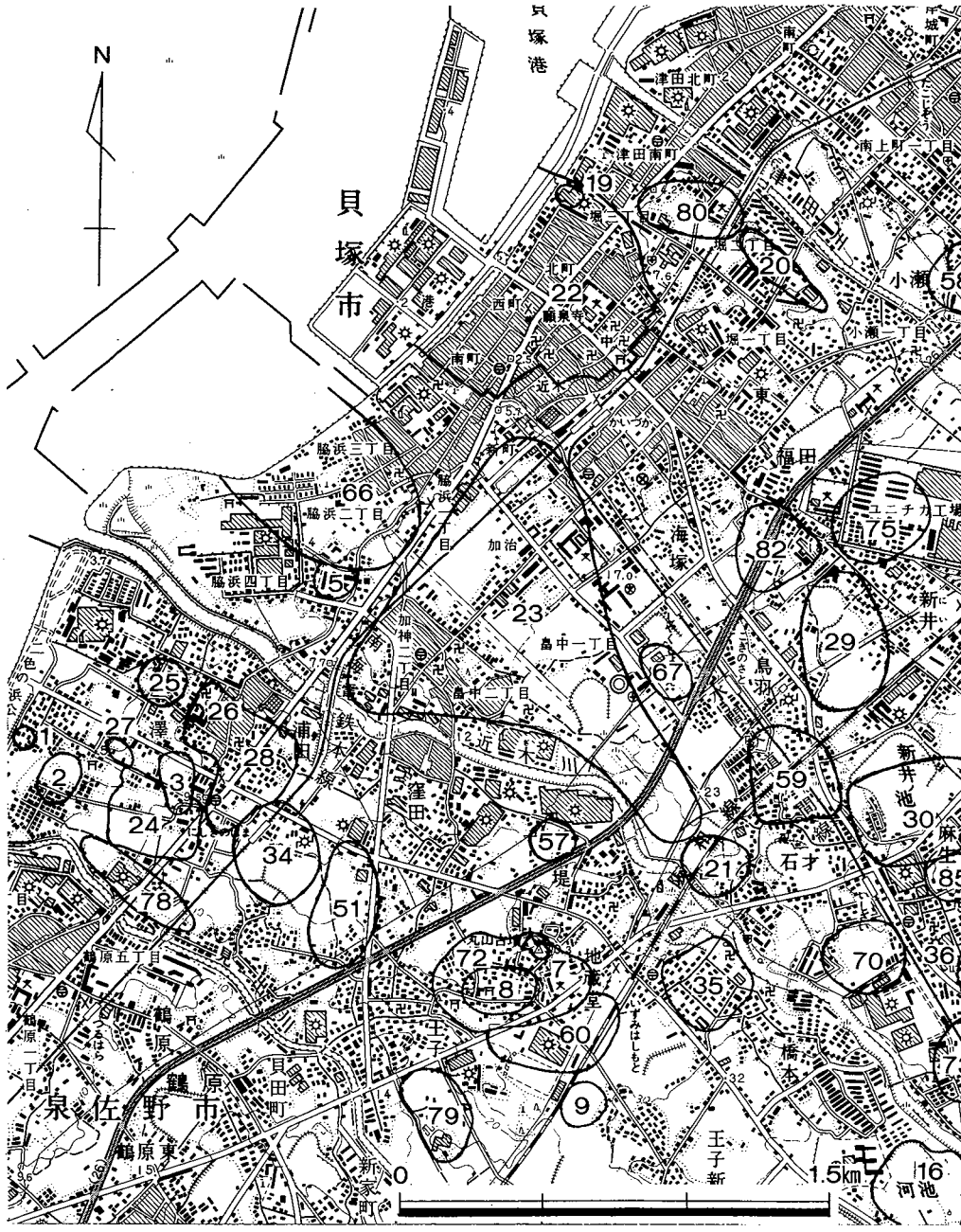
貝塚市沢220番地他地内に所在する工場跡地に情報処理管理センター建設の開発計画が、㈱ヤシマからもちあがった。本開発予定地は周辺に多数の埋蔵文化財包蔵地が確認されているものの、周知の遺跡としてはまだ未確認の地域であった。

このような状況下ではあったが、開発面積が膨大であると同時に本市において特に周知の遺跡が集中する地域の一つである沢地内にあたり、また、見出川右岸の段丘端部という立地条件から、埋蔵文化財が包蔵されている可能性は十分に想定される地域であった。そこで、開発者と貝塚市教育委員会との間で埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、遺構確認調査を実施した上で遺構等の存在が明らかとなった場合、本格的調査を実施するものとの合意をみた（図１）

遺構確認調査は平成２年８月６日から８月10日にかけて実施した。その結果、調査地の東部に中世と考えられる柱穴、溝等を検出した。

この結果をもとに、再度開発者と遺跡の取り扱いについて協議を重ねた結果、遺構を検出した開発予定地東部において、開発によって破壊を受ける部分約1860㎡について本格的な発掘調査を実施することの合意をみた。

発掘調査期間は開発との関係から２時期に分け、第１区を平成２年９月21日から11月21日にかけて、第２区を同年11月13日から12月27日にかけて実施した。



1.沢新出遺跡 2.沢海岸遺跡 3.沢遺跡 5.長楽寺跡 7.丸山古墳 8.寺蔵堂廃寺跡 9.下新出遺跡 16.河池遺跡 19.泉州麻生塩壺出土地 20.堀遺跡 21.橋本遺跡 22.貝塚寺内町遺跡 23.加治神前畠中遺跡 24.明楽寺跡 25.沢共同墓地遺跡 26.沢西出遺跡 27.沢海岸北遺跡 28.沢城跡 29.新井鳥羽遺跡 30.新井ノ池遺跡 34.澱池遺跡 35.積善寺城跡 36.清児遺跡 51.窪田遺跡 57.堤遺跡 58.小瀬五所山遺跡 59.石才遺跡 60.王子遺跡 66.脇浜遺跡 67.今池遺跡 70.石才南遺跡 72.地蔵堂遺跡 73.名越西遺跡 75.新井鳥羽北遺跡 78.沢西遺跡 79.王子西遺跡 80.津田遺跡 82.福田遺跡 85.麻生中出口遺跡

図1. 貝塚市遺跡分布図

第２章　位置と環境

沢西遺跡は、泉佐野市と境界をなす見出川右岸の段丘端部に位置し、東西約480ｍ、南北約140ｍの範囲に広がる弥生時代から近世にかけての集落跡である。遺跡マーク地内の大部分は農地が広がっており、今後、これらの農地を対象として開発の進むことが充分考えられる地域である。海抜約５～９ｍを測る。（図２）

周辺に散在する遺跡としては、北には平安時代の寺院跡である明楽寺跡、弥生時代前期末の集落跡、奈良時代の集落跡を検出した沢遺跡、東には中世集落跡の澱池遺跡などが散在する。

今回の調査地は遺跡マーク地内北西部にあたり、見出川による河岸段丘端部、海に向かってゆるやかに傾斜しはじめる地点に位置し、海抜約6.5～７ｍを測る地点である。

周辺の調査例より中世の集落跡等を検出することを想定し、調査に着手していった。

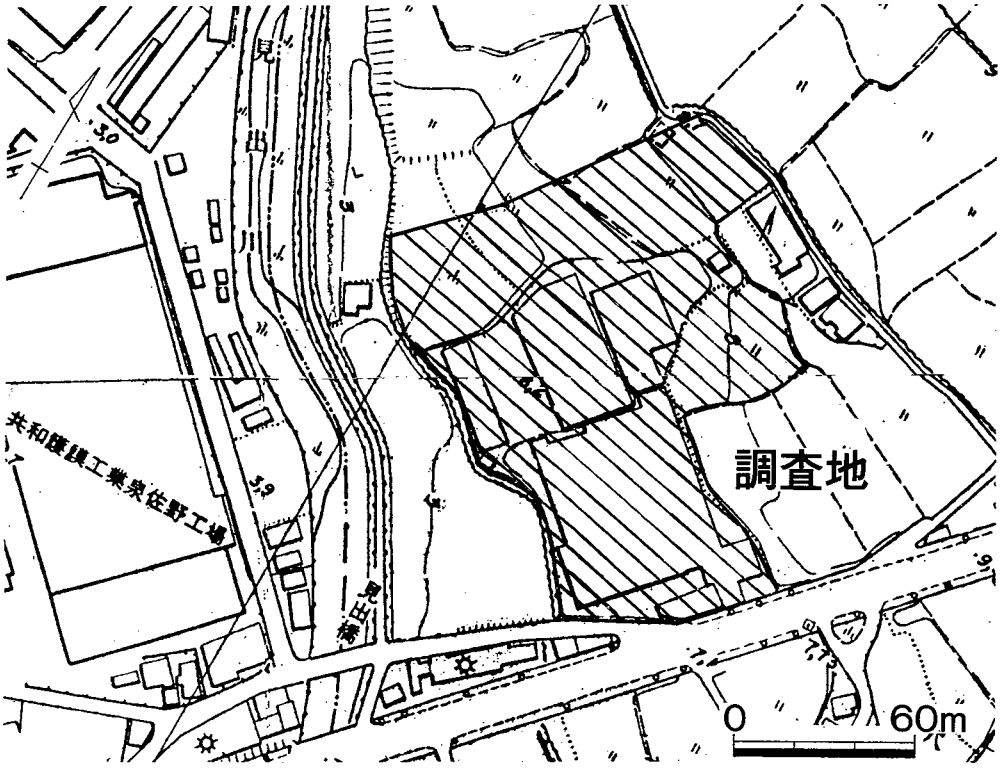


図2. 調 査 位 置 図

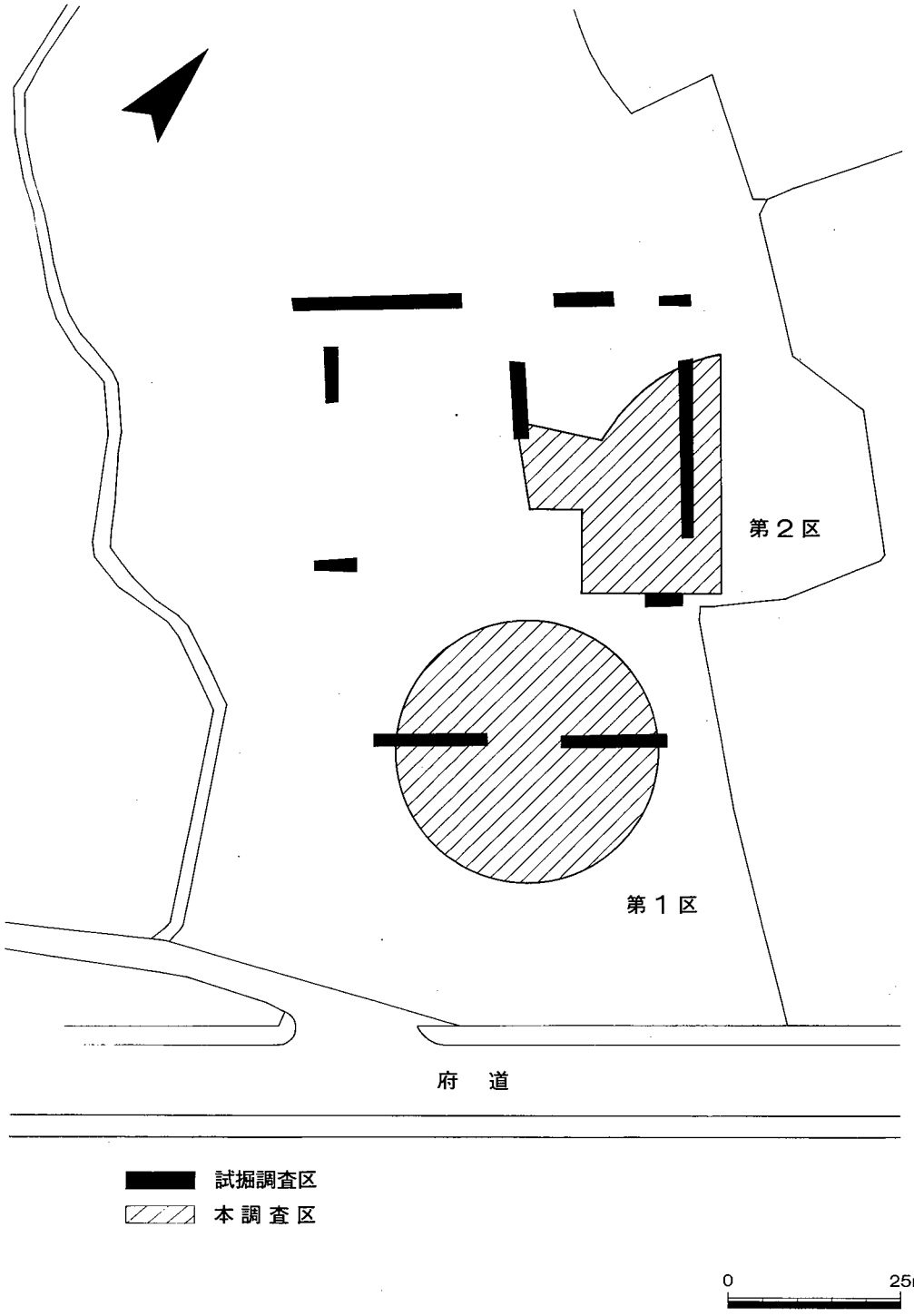


図3. 調査地概略図

第３章　調査成果

第 1 節　調査の概要

開発計画に基づき、調査地内に幅２ｍ、長さ約４～26ｍの調査区を10ケ所設定し、試掘調査を開始した。（図３）

試掘調査の結果、調査地の西部には遺構が全く検出できず、また、大きく撹乱を受けていることが判明した。東部に設定した各調査区では、中世を中心とする溝、柱穴等を検出し、また、中世の遺物包含層が良好に存在することが明らかとなった。

この試掘調査の結果から、２ケ所の建物によって破壊を受ける部分に調査区を設定し、これらの遺構群の性格を把握することを目的として本格的調査を実施していった。

本調査は、半径約19ｍ、面積約1130㎡の円形の調査区を第１区とし、その北側に南北約36ｍ、東西約20～31ｍ、面積約725㎡の調査区を第２区として設定した。また、調査区において南北に対し西へ45°振ったラインを基準とした10×10ｍの区画を用い、南北に10区画を設け南からＡ～Ｊの記号を与え、東西に７区画を設け東から０～６の番号を与えた。

調査では各調査区のほぼ全域において遺構を検出したが、第１区のＤ・Ｅ－４・５区付近は大きく削平を受けていた。（図４）

第 2 節　基本層序（図５）

第１区と第２区は見出川の右岸約100ｍ、河口より約700ｍの河岸段丘部分に隣り合って位置しているため川の方角に傾斜しているほか、海方向にも傾斜している。第１区は山側に第２区は海側に位置しており、地形は第１区から第２区の方向に傾斜している。

第１区は、見出川方向に向かって傾斜している。層序は上から順に、耕作土（約0.3ｍ）、淡灰褐色の旧耕作土（約0.1ｍ）、淡黄褐色の旧床土（約0.1ｍ、第３層）、層厚0.1ｍを測る暗褐色土（第４層）が堆積する。調査区の北側部分は良好な状態で地層が残っているが、南側は地形変化と同時に以前工場があったことに伴う撹乱によりわずかな包含層を残すのみでその下が地山といった状況である。しかし、基本的な層序については同様と考えてよいと思われる。地山の状況はＢ・Ｃ－２区が暗黄褐色の礫混じり土の他は黄色土及び黄色粘土である。

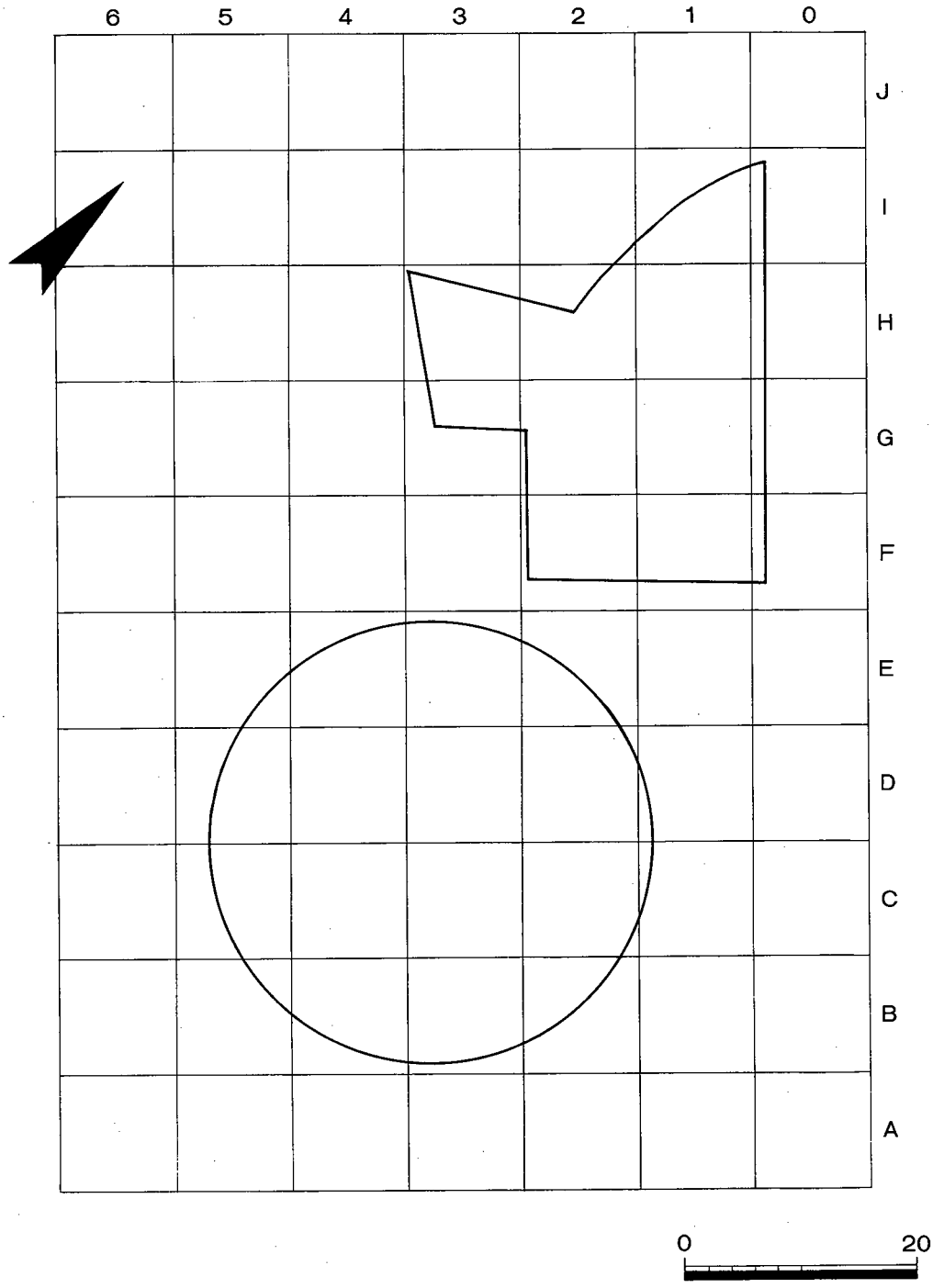


図4. 調 査 地 地 区 割 図

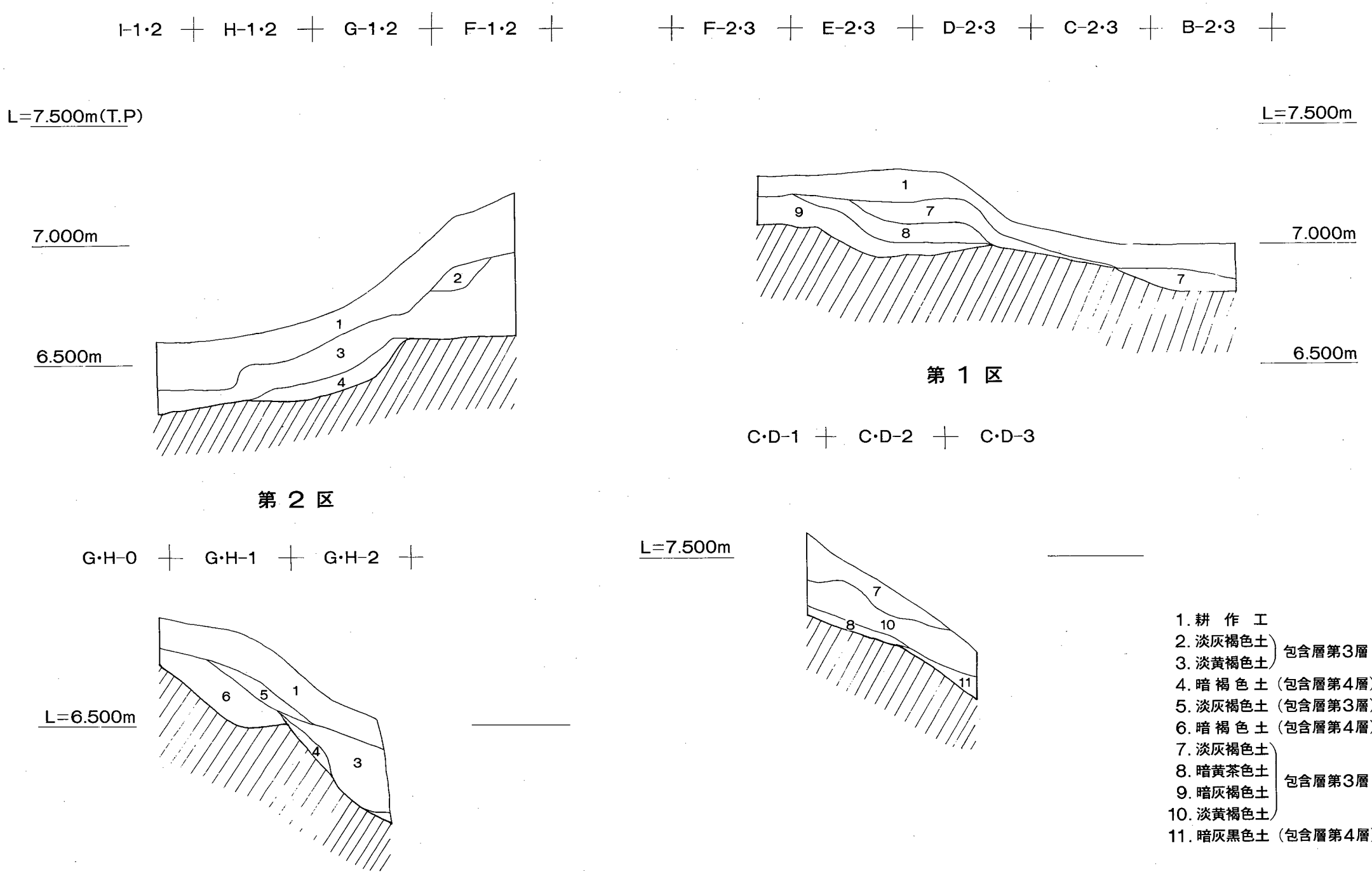

I-1·2
H-1·2
G-1·2
F-1·2
L=7.500m(T.P)
7.000m
6.500m
1
2
3
4
第 2 区
G·H-0
G·H-1
G·H-2
L=6.500m
1
3
4
5
6
F-2·3
E-2·3
D-2·3
C-2·3
B-2·3
L=7.500m
7.000m
6.500m
1
7
8
9
第 1 区
C·D-1
C·D-2
C·D-3
L=7.500m
7
8
10
11
1. 耕 作 工
2. 淡灰褐色土
3. 淡黄褐色土
包含層第3層
4. 暗 褐 色 土（包含層第4層）
5. 淡灰褐色土（包含層第3層）
6. 暗 褐 色 土（包含層第4層）
7. 淡灰褐色土
8. 暗黄茶色土
9. 暗灰褐色土
10. 淡黄褐色土
包含層第3層
11. 暗灰黒色土（包含層第4層）

図5. 調査区土層略図

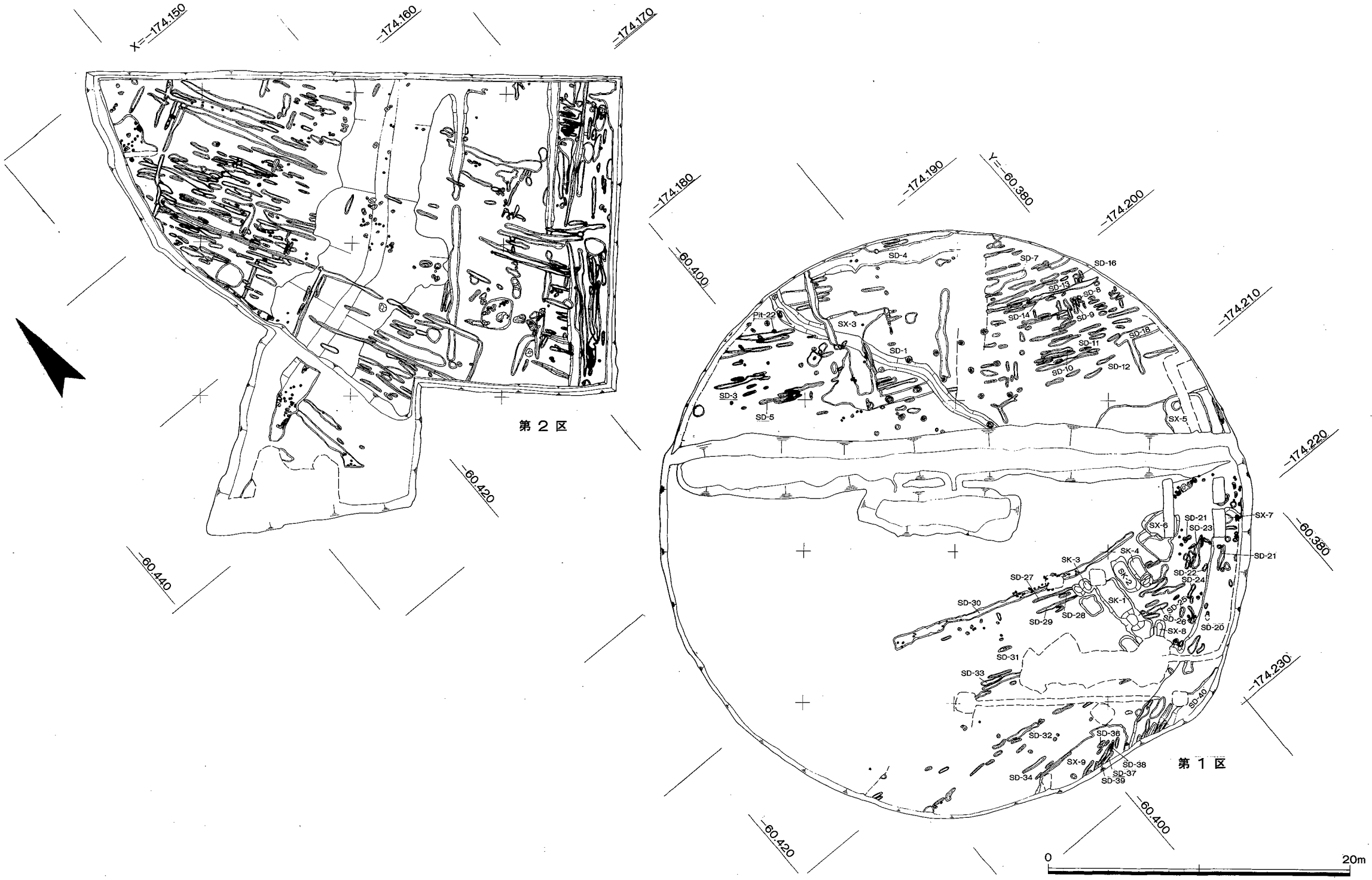

X=-174.150
-174.160
-174.170
-174.180
-174.190
Y=-60.380
-174.200
-174.210
-174.220
-174.230
-60.400
-60.420
-60.440
第２区
第１区
SD-1
SD-3
SD-4
SD-5
SD-7
SD-8
SD-9
SD-10
SD-11
SD-12
SD-13
SD-14
SD-16
SD-18
SD-20
SD-21
SD-22
SD-23
SD-24
SD-26
SD-27
SD-28
SD-29
SD-30
SD-31
SD-32
SD-33
SD-34
SD-36
SD-37
SD-38
SD-39
SD-40
SX-3
SX-5
SX-6
SX-7
SX-8
SX-9
SK-1
SK-2
SK-3
SK-4
Pit-22
0
20m

図6. 遺 構 配 置 図

第２区は、第１区との比高約0.6ｍを測り、海方向に傾斜している。層序は上から順に耕作土（約0.3ｍ）、層厚約0.35ｍを測る淡黄褐色土（第３層）、層厚約0.15ｍを測る暗褐色土（第４層）が堆積する。地山は黄色土及び黄色粘土である。第２区においても、調査区南側において地形の変化と工場による撹乱が存在するが、基本的には北側部分と同様と考えてよいと思われる。

地形変化が顕著な場所であるためか第１区はそれぞれの層厚が薄いのに対して第２区は比較的厚いようである。第１区と第２区の層序を考えると若干の差がみられるが大きく層をとらえるならば第３層・第４層に分けて考えることができる。

遺物包含層は、第３層・第４層である。第３層は瓦器や陶磁器といった遺物が主に出土しており中世から近世にかけてのものである。第４層は中世以前の遺物も含まれるが主に瓦器、白磁、青磁が多く出土しておりおおむね中世のものであると考えられる。

調査地区の現地表面はT.P.7.2ｍ～T.P.6.2ｍを測り、見出川右岸の河岸段丘の地形変化部分に位置するため現状地盤の高低差は、東から西方向（海方向）に約0.6ｍ下がるほか南北方向（見出川方向）に約１ｍ下がっている。

第３節　検出遺構

１．第１区

中世以前

ＳＤ－１（図７、図版４）

本遺構はＣ・Ｄ－２・３区にて検出した溝である。調査区外に広がるためまた、撹乱により全体の規模は不明であるが、南北方向（見出川）に走り幅約0.8ｍ深さ約0.25ｍを測る。埋土は、暗褐色粘土である。遺物は、土師器、須恵器が細片で出土しているほか、陶器片が出土しているがこの遺物に関しては溝埋土上面包含層の遺物の可能性もある。したがって、出土遺物はこの溝の時期決定に有力な要素とはなりえない。そこで、遺構の切り合いから考えればこのＳＤ－１は中世の堀立柱建物と考えられるＳＢ－１に切られており中世以前のものであると考えられる。

ＳＤ－２

本遺構はＤ－２区にて検出した溝である。調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、検出長5.8ｍ、幅0.5ｍを測る。埋土は、暗灰色土で深さ15㎝を測る。ＳＤ－１を切っており見出川方向に流れていたようであるが削平を受けており途中で消失する。遺物は、

黒色土器片、土師器片の小片が出土しているが、この溝の時期決定に有力なものではなく中世以前であると考えられる。

ＳＤ－４

本遺構はＤ－２区にて検出した溝である。調査区外に広がり、また、ＳＤ－２に切られるため全体の規模は不明であるが、東西方面に走り幅0.9ｍを測る。埋土は灰褐色土で深さ約10㎝を測る。遺物は、土師器片、黒色土器片、陶器片、サヌカイト片が出土している。

ＳＤ－20

本遺構はＢ－３・４区にて検出した溝である。調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、東西方向に走り検出長17ｍ幅約2.5ｍを測る。埋土は暗褐色土で深さ20㎝を測る。遺物は、須恵器片、土師器片、黒色土器片が出土している。

ＳＤ－40

本遺構はＢ・Ｃ－４区にて検出した溝である。調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、検出長5.4ｍを測る。埋土は暗灰褐色土で深さ約10㎝を測る。遺物は、須恵器片、土師器片、黒色土器片が出土している。

ＳＸ－２

本遺構はＤ－２区にて検出した性格不明遺構である。ＳＤ－１、ＳＤ－２に切られているため全体の規模は不明であるが検出長1.4ｍ幅１ｍを測る。埋土は灰色土で深さ約10㎝を測る。遺物は、黒色土器片、土師器片が出土している。

ＳＸ－４

本遺構はＤ－２区にて検出した性格不明遺構である。ＳＸ－３、ＳＢ－１に切られているため全体の規模は不明である。埋土は淡茶褐色土で深さ約５㎝を測る。遺物は、土師器片が出土している。

中世

ＳＢ－１（図８、図版５）

本遺構はＣ・Ｄ－２・３区にて検出した掘立柱建物である。ＳＤ－１を切り位置する。梁行３間（1.9×1.9×1.9＝5.7ｍ）、桁行４間（1.9×1.9×1.8×1.7＝7.3ｍ）であり、棟方向はやや東へ傾く東西方向である。掘方は平面プラン円形を呈し、径0.35～0.5ｍ、柱当0.15～0.3ｍ、深さ0.1～0.2ｍを測る。埋土は暗褐色土である。遺物は柱当部分より、土師器片が出土している。

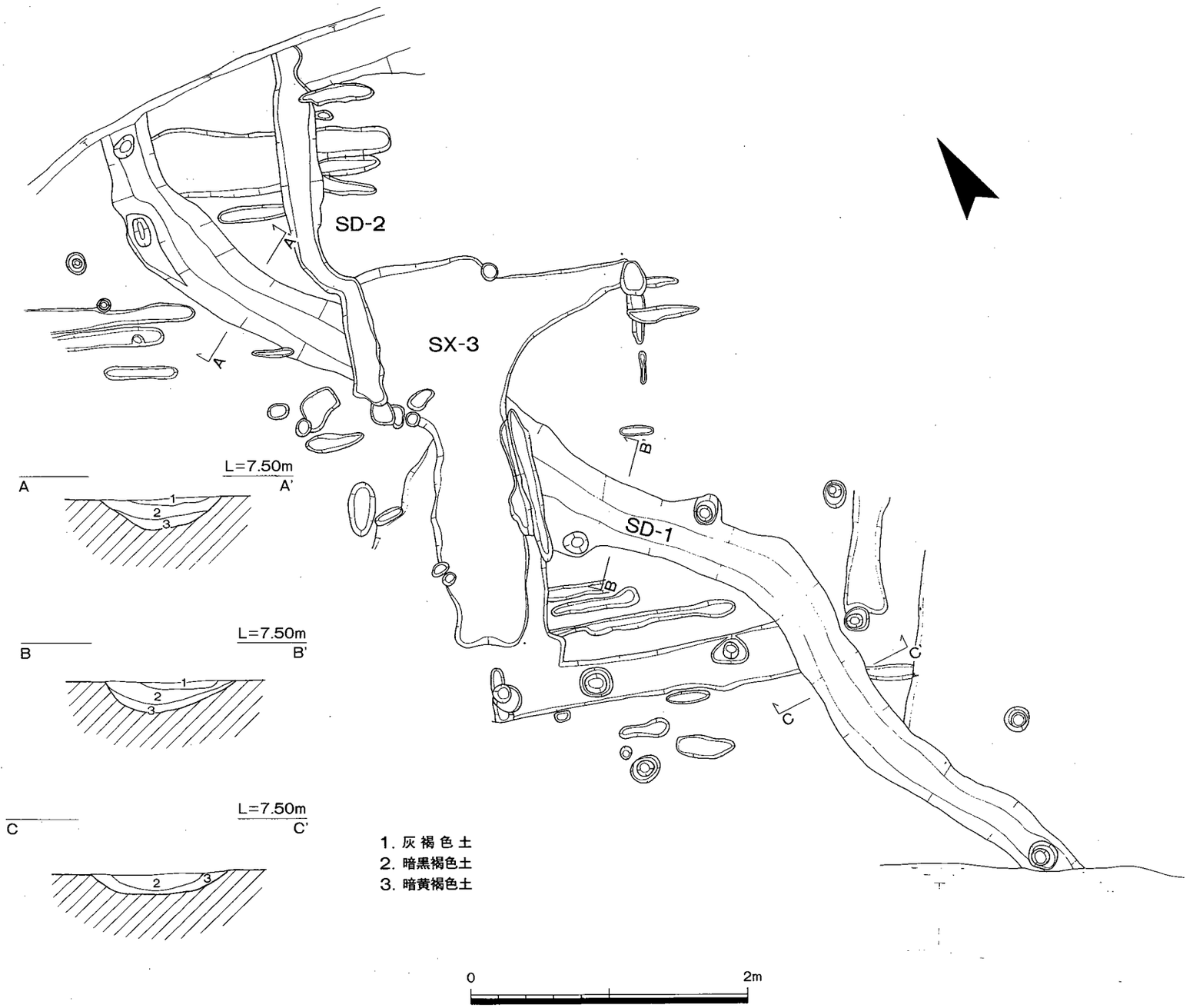


図7. SD—1　平面図及び断面図

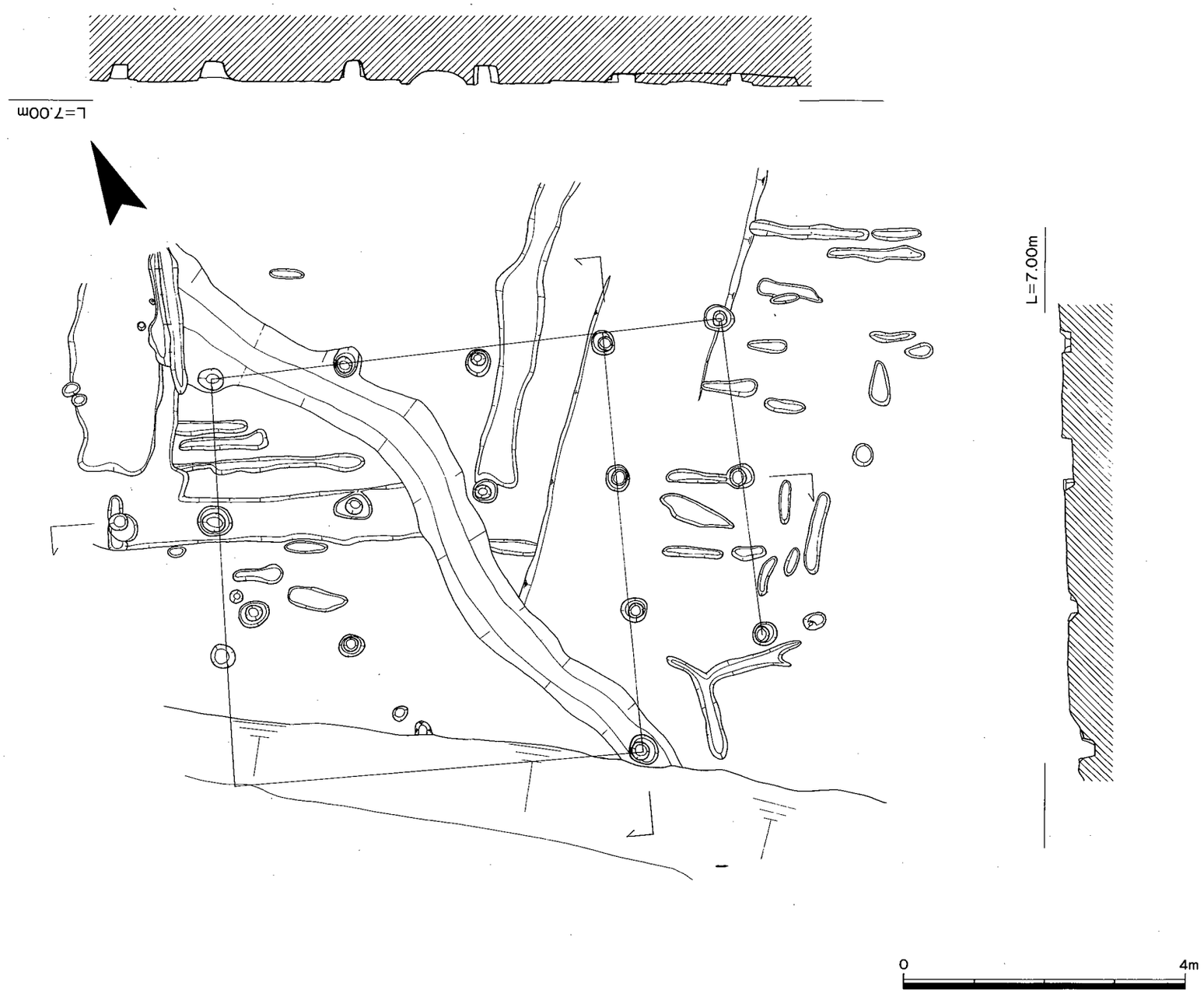


図8. SB—1　平面図及び断面図

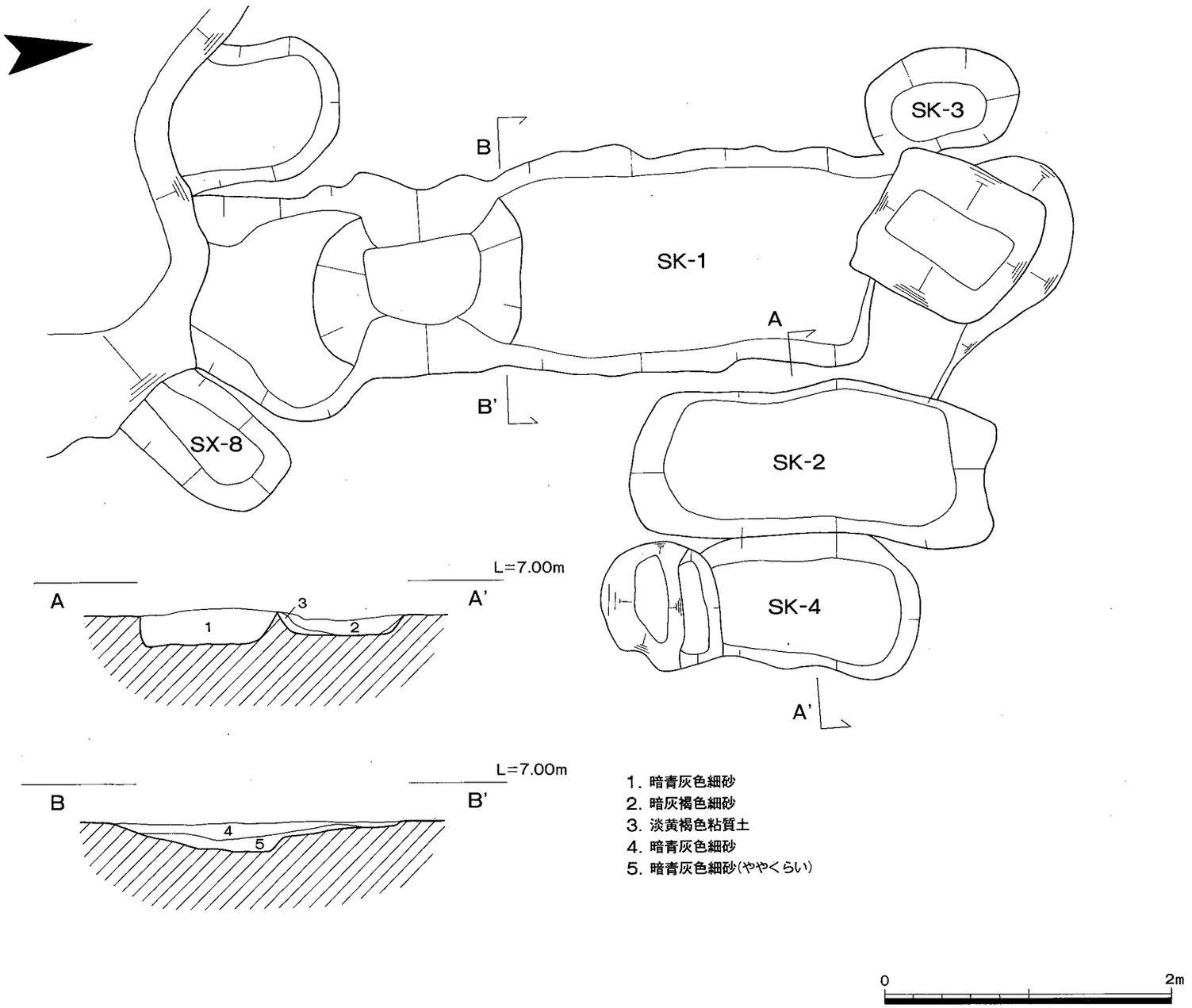


図9. SK—1, —2, —4　平面図及び断面図

ＳＸ－１

本遺構はＤ－２区にて検出した性格不明遺構である。不整形を呈し長軸１ｍ短軸0.9ｍを測る。埋土は淡灰褐色土で深さ５㎝を測る。遺物は、土師器片が出土している。

ＳＸ－３

本遺構はＤ－２区にて検出した性格不明遺構である。検出長軸5.5ｍ幅1.2ｍを測る。埋土は、淡茶灰色土で厚さ約10㎝を測る。ＳＤ－１が自然に埋まった状態で残ったくぼみを人為的に埋めたものであると考えられる。遺物は、黒色土器片、土師器片が出土している。

ＳＸ－５

本遺構はＣ－２区にて検出した性格不明遺構である。撹乱により切られているため全体の規模は不明であるが検出長2.5ｍを測る。埋土は灰色土で深さ約10㎝を測る。遺物は、土師器片が出土している。

ＳＸ－７

本遺構はＢ－３区にて検出した性格不明遺構である。撹乱により切られているため全体の規模は不明であるが検出幅0.6㎝を測る。埋土は暗灰色土で深さ約10㎝を測る。遺物は、須恵器片、土師器片が出土している。

ＳＸ－９

本遺構はＣ－５区にて検出した性格不明遺構である。調査区外に広がるためまた撹乱により切られているため全体の規模は不明であるが、検出長６ｍ、幅約２ｍを測る。埋土は暗灰色土で深さ約10㎝を測る。須恵器片、青磁碗片が出土している。

鋤き溝

中世の遺構において一番数多く検出されている鋤き溝についてその概要を示す。東西より若干角度が振る方向のものとほぼ南北のものの２種類のものが検出されている。時期的には南北方向のものが新しいと考えられる。また、ＳＢ－１がなくなって以後に耕作がなされている。埋土は、淡灰色土で平均の幅は約0.2ｍ、深さ約５㎝を測る。出土遺物はいずれも細片で実測できなかった。

ＳＤ－３

本遺構はＥ－２区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸3.5ｍ、幅約0.2ｍを測る。遺物は、黒色土器、土師器の細片が出土している。

ＳＤ－５

本遺構はＥ－２区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸2.3ｍ幅約0.2ｍを測る。遺物は、黒色土器片が出土している。

ＳＤ－６

本遺構はＣ－２区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸0.7ｍ幅0.2ｍを測る。遺物は須恵器片、土師器片、瓦器片が出土している。

ＳＤ－７

本遺構はＣ－２区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸2.9ｍ幅0.5ｍを測る。遺物は、須恵器、土師器片、黒色土器片が出土している。

ＳＤ－８

本遺構はＣ－２区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸0.55ｍ幅0.2ｍを測る。遺物は、土師器片が出土している。

ＳＤ－５

本遺構はＣ－２区にて検出した溝である。他の遺構に切られているため全体の規模は不明であるが検出長軸約0.4ｍを測る。遺物は、黒色土器片が出土している。

ＳＤ－10

本遺構はＣ－２区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸2.8ｍ幅0.15ｍを測る。遺物は、土師器片が出土している。

ＳＤ－11

本遺構はＣ－２区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸0.8ｍ幅0.15ｍを測る。遺物は、土師器片が出土している。

ＳＤ－１２

本遺構はＣ－２区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸0.9ｍ幅0.2ｍを測る。遺物は、黒色土器片が出土している。

ＳＤ－13

本遺構はＣ－２区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸0.35ｍ幅0.15ｍ測る。遺物は土師器片が出土している。

ＳＤ－14

本遺構はＣ－２区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸5.2ｍ幅0.2ｍを測る。遺物は、土師器片が出土している。

ＳＤ－16

本遺構はＣ－２区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸0.55ｍ幅02.ｍを測る。遺物は、土師器片が出土している。

ＳＤ－18

本遺構はＣ－２区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸３ｍ幅0.65ｍを測る。遺物は、瓦器片が出土している。

ＳＤ－19

本遺構はＢ－３区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸0.45ｍ幅0.1ｍを測る。遺物は土師器片、須恵器片が出土している。

ＳＤ－21

本遺構はＢ－４区にて検出した溝である。長軸0.25ｍを測る。遺物は、土師器片が出土している。

ＳＤ－22

本遺構はＢ－４区にて検出した溝である。長軸0.5ｍ幅0.2ｍを測る。遺物は、土師器片が出土している。

ＳＤ－23

本遺構はＢ－４区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸2.2ｍ幅0.4ｍを測る。遺物は、土師器片が出土している。

ＳＤ－24

本遺構はＢ－４区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸１ｍ幅02.ｍを測る。遺物は土師器片が出土している。

ＳＤ－25

本遺構はＢ－３区にて検出した溝である。長軸1.7ｍ幅0.3ｍを測る。遺物は、土師器片、瓦器片が出土している。

ＳＤ－26

本遺構はＢ－４区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸1.5ｍ幅0.3ｍを測る。遺物は、土師器片が出土している。

ＳＤ－27

本遺構はＣ－４区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸2.8ｍ幅0.15ｍを測る。遺物は、土師器片が出土している。

ＳＤ－28

本遺構はＣ－４区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸0.8ｍ幅0.15ｍを測る。遺物は、土師器片が出土している。

ＳＤ－29

本遺構はＣ－４区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸３ｍ幅0.2ｍを測る。遺物は土師器片が出土している。

ＳＤ－31

本遺構はＣ－４区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸0.9ｍ幅0.25ｍを測る。遺物は、土師器片が出土している。

ＳＤ－32

本遺構はＣ－５区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸2.3ｍ幅0.3ｍを測る。遺物は、土師器片が出土している。

ＳＤ－33

本遺構はＣ－４区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸1.4ｍ幅0.2ｍを測る。遺物は、黒色土器片が出土している。

ＳＤ－34

本遺構はＣ－５区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸1.85ｍ幅0.2ｍを測る。遺物は、土師器片が出土している。

ＳＤ－36

本遺構はＣ－５区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸0.6ｍ幅0.15ｍを測る。遺物は、須恵器片、土師器片が出土している。

ＳＤ－37

本遺構はＣ－５区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸１ｍ幅0.2ｍを測る。遺物は土師器片、黒色土器片が出土している。

ＳＤ－38

本遺構はＣ－５区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸0.7ｍ幅0.2ｍを測る。遺物は須恵器片が出土している。

ＳＤ－39

本遺構はＣ－５区にて検出した溝である。東西方向に走り長軸1.7ｍ幅0.2ｍを測る。遺物は黒色土器片が出土している。

近世

ＳＫ－１（図９、図版６）

本遺構はＢ・Ｃ－３区にて検出した土坑である。撹乱により切られているため全体の規模は不明であるが検出長4.7ｍ幅1.5ｍを測る。埋土は暗青灰色細砂で深さ20㎝を測る。遺物は須恵器片、土師器片、磁器片、瓦片、陶器片、鉄片、土錘が出土している。ＳＫ－１からＳＫ－４は粘土採掘坑と考えられ地山の粘土を掘り採りその後土器等とともに穴を埋めたものと考えられる。埋土も似ておりほぼ同時期のものと考えられる。時期は出土遺物から19世紀ごろのものと考えられる。

ＳＫ－２（図９、図版６）

本遺構はＢ－３区にて検出した土坑である。検出長2.5ｍ幅１ｍを測る。埋土は暗青灰色細砂で深さ20㎝を測る。遺物は、須恵器片、土師器片、瓦片、土錘が出土している。

ＳＫ－３

本遺構はＣ－３区にて検出した土坑である。撹乱により切られているため全体の規模は不明であるが、検出長1.1ｍ幅0.7ｍ測る。埋土は暗青灰色細砂で深さ28㎝を測る。遺物は磁器片、瓦片が出土している。

ＳＫ－４（図９、図版６）

本遺構はＢ－３区にて検出した土坑である。撹乱により切られているため全体の規模は不明であるが検出長1.4ｍ幅0.9ｍを測る。埋土は暗青褐色細砂で深さ20㎝を測る。遺物は出土していない。

ＳＫ－６

本遺構はＣ－３区にて検出した性格不明遺構である。撹乱により切られているため全体の規模は不明であるが検出長1.5ｍを測る。埋土は暗青灰色砂で深さ40㎝を測る。遺物は、瓦片、土師器片、陶器片が出土している。粘土採掘坑の可能性の高い遺構である。

ＳＸ－８

本遺構はＢ－４区にて検出した性格不明遺構である。撹乱により切られているため全体の規模は不明であるが検出長1.1ｍを測る。埋土は暗青灰色砂で深さ約20㎝を測る。遺物は、土師器片が出土している。粘土採掘坑の可能性の高い遺構である。

ＳＤ－30

本遺構はＢ・Ｃ－３・４区にて検出した溝である。ほぼ東西方向に走り長軸17.5ｍ幅0.5ｍを測る。埋土は灰色土で深さ約10㎝を測る。遺物は、土師器片、須恵器片、瓦片、陶器

片が出土している。耕作用の水路として使用されたもので多くの杭、杭跡が検出されている。

2．第2区

調査では調査区のほぼ全域において各種の遺構を検出した。G・H－2・3区では大きく削平を受けているが、それ以外の部分では良好な状態で遺構が存在する。内容は、弥生時代と思われる大溝、中世の溝、土坑等、溝がその大部分をしめる。遺構はすべて地山面にて検出し、遺構埋土が黒褐色系と淡灰色系の2種類に分類できる。

以下、調査によって明らかとなった主なものについて、埋土分類ごとにその概要を示す。

ＳＤ－238（図10、図版8）

本遺構はG－6～H－3にて検出した溝である。H－2・3区にて削平を受けているが、検出長約25m、最大幅約9m、深さ約0.4mを図り、断面は薄いレンズ状を呈す。埋土は上層黒褐色粘土、中層淡茶灰色シルト、下層は淡紫灰色細砂である。G－0・1区では北東～南西、G・H－2区～H－3区にかけてはほぼ東西方向に走る。遺物はG－1区上層より弥生土器壺頸部、底部などが出土した。

ＳＤ－240（図10）

本遺構はH－2区にて検出したスキ溝である。幅15～30cm、長さ2.8m深さ4～5cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は黒褐色粘質土である。遺物は土師器細片が出土した。

ＳＤ－242（図10）

本遺構はI－1区にて検出したスキ溝である。幅約50cm、検出長約1.1m、深さ2～3cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。土師器細片が出土した。

ＳＤ－243（図10）

本遺構はH－1区にて検出したスキ溝である。幅20～35cm、長さ2.9m、深さ約3cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。土師器小皿が出土した。

ＳＤ－251（図10）

本遺構はH－1区にて検出したスキ溝である。幅約25cm、長さ5.2m、深さ約6cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は瓦器、土師器の細片が出土した。

上記のＳＤ－240～251を含む、磁北から西へ23°振った南北方向に走るスキ溝は埋土がすべて黒褐色粘土であり、ほぼ同時期のものであると思われる。

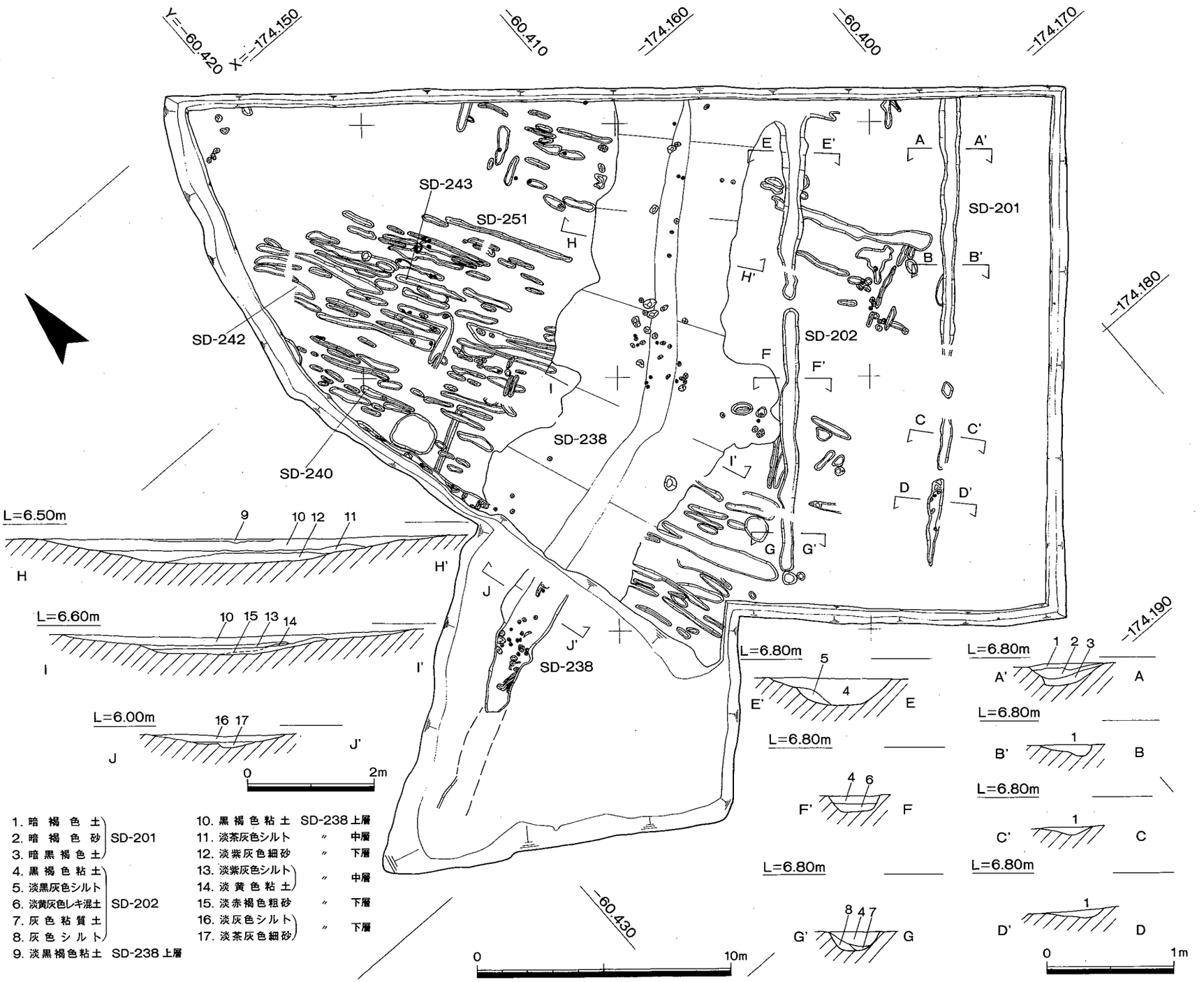


図10. 第 2 区遺構配置図（黒褐色系埋土）

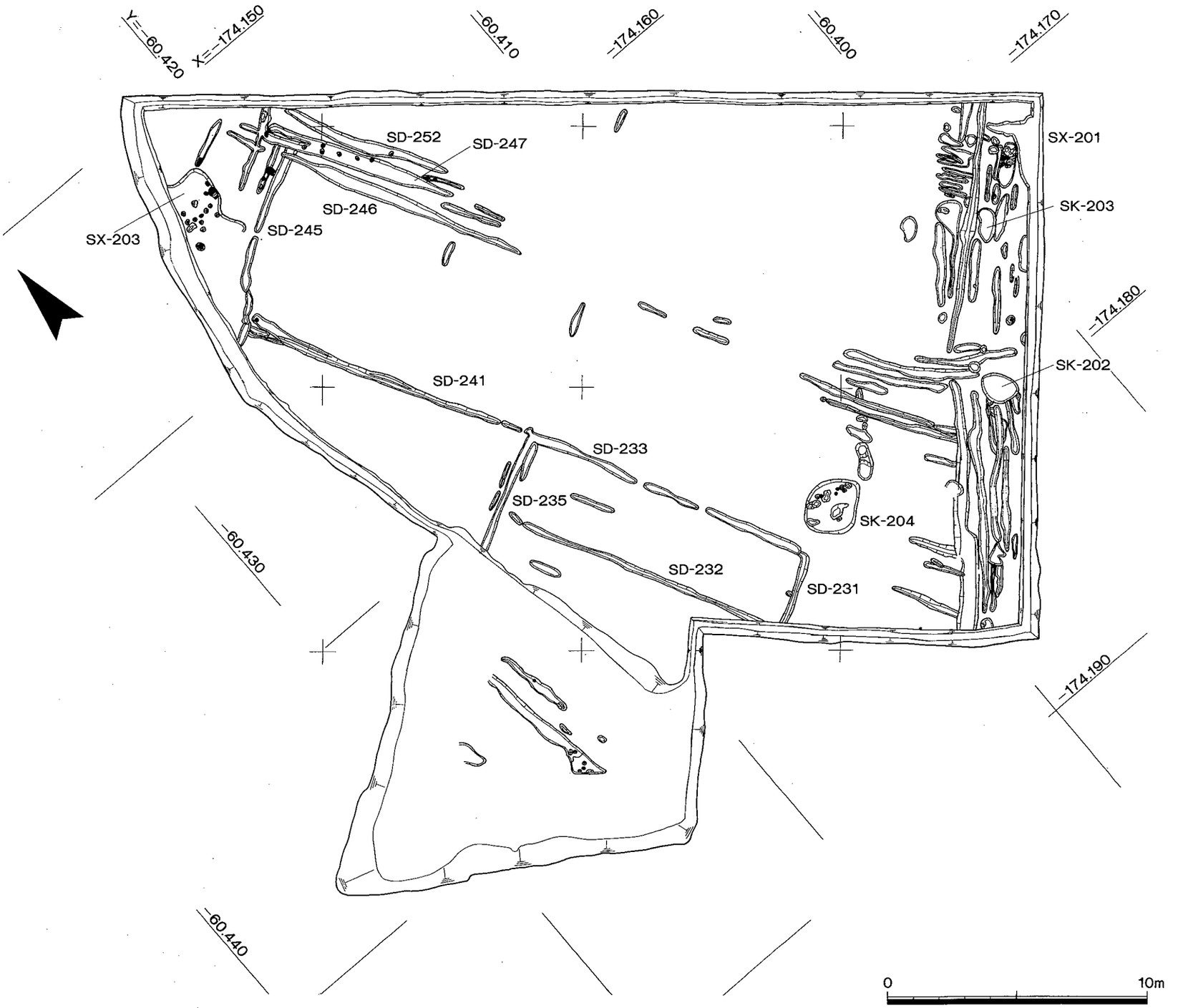


図11. 第２区遺構配置図（淡灰色系埋土）

ＳＤ－201（図10、図版９）

本遺構はＦ－０～Ｆ－２区にて検出した溝である。幅40～70㎝、検出長約18.4ｍ、深さ６～15㎝を測る。北東から南西に走り、比高約10㎝を測る。断面はレンズ状を呈し、埋土は上層黒褐色粘土、中層黒褐色細砂、下層は黒褐色砂混り土である。遺物は土師器細片が出土した。

ＳＤ－202（図10、図版９）

本遺構はＧ－０～Ｇ－２区にて検出した溝である。幅40～110㎝、検出長約18ｍ、深さ12～20㎝を測る。ＳＤ－201と並行に走り、比高約24㎝を測る。断面はレンズ状を呈し、埋土は上層黒褐色粘土、下層は灰色シルト、粘質土である。遺物は瓦器椀、土師器の細片が出土した。

ＳＤ－231、232、233、235、241、245、246（図11、図版10）

本遺構はＧ－２～Ｉ－１区にかけて検出した溝群である。ＳＤ－232、233、241、246は黒褐色系の埋土のスキ溝と方向が同じであり、それと直行する形でＳＤ－231、235、245が位置する。幅20～40㎝、深さ２～11㎝を測る。断面は逆台形を呈し、埋土は淡灰色土である。黒褐色系埋土スキ溝と方向が合うものの、切り合い関係は本溝群が後のものである。遺構の性格としては、耕作地を区画する溝であることが考えられ、現存するものからは４区画以上あるものと思われる。遺物は瓦器椀片、土師器片が少量づつ出土している。

ＳＤ－247、252（図11、図版10）

本遺構はＨ・Ｉ－１区で検出した溝である。幅20～65㎝、深さ３～６㎝を測る。断面は逆台形を呈し、埋土は淡灰色土である。遺構の性格としては先述のＳＤ－231等と同じ区画溝であることが考えられ、切り合い関係からそれらより新しい時期のものである。

ＳＫ－202（図11）

本遺構はＦ－１・２区にて検出した土坑である。長軸1.5ｍ、短軸1.1ｍ、深さ４～６㎝を測る。埋土は淡茶灰色土である。遺物は瓦器、土師器細片が出土した。

ＳＫ－203（図11）

本遺構はＦ－１区にて検出した土坑である。長軸1.3ｍ、短軸0.6ｍ、深さ２～６㎝を測る。埋土は淡茶灰色レキ混砂質土である。遺物は瓦器、土師器細片が出土した。

ＳＫ－204（図11）

本遺構はＦ・Ｇ－２区にて検出した土坑である。幅２ｍ、深さ12～28㎝を測る。埋土は淡灰色土、遺物はサヌカイト片が出土した。

ＳＸ－201（図11）

本遺構はＦ－０・１区にて検出した性格不明遺構である。調査区外に広がるため全体の規模は不明だが、長軸2.7ｍ短軸1.7ｍ、深さ３～６㎝を測る。埋土は淡灰色土であり、遺物は瓦器、土師器細片が出土した。

ＳＸ－203（図11）

本遺構はＩ－１区にて検出した性格不明遺構である。調査区外に広がり、他遺構に切られるため全体の規模は不明だが、長軸3.5ｍ、短軸３ｍ、深さ約５㎝を測る。埋土は淡灰色土であり、遺物は瓦器、土師器片が出土した。

第４節　出土遺物

１．第１調査区

多数の遺構から多数の土器が出土しているが、小片が大半を占めており実測に耐えないものが多かった。以下主なものについて概要を示す。

青磁（図12、図版11）

１～８は青磁碗口縁部片である。

１は、ＳＤ－20にて出土したもので口径13.6㎝を測る。２は、ＳＸ－９にて出土したもので口径は不明である。３～６は包含層第３層にて出土したものである。３は口径不明で外面に蓮弁文を施す。４は口径不明で外面に蓮弁文を施す。５は口径13.6㎝を測り外面に蓮弁文を施す。

６～８は底部片である。６は包含層第３層にて出土したもので復元高台径3.6㎝を測る。７・８は包含層にて出土したものである。７は復元底部径6.4㎝を測る。８は内面に草花文を施す。

漁撈具（図13、図版11）

９、16は、ＳＫ－１にて出土した土師質土錘である。９は直径0.8㎝を測る。16は直径5.4㎝を測る。13は、ＳＫ－２にて出土した直径0.8㎝を測る土師質土錘である。10～12、14は第３層にて出土した土師質土錘である。３点とも直径0.8㎝を測る。

15は、ＳＫ－３から出土した須恵質飯蛸壺片である。17は、ＳＫ－１にて出土した土師質真蛸壺底部片である。

ＳＫ－１（図14）

18～22は磁器碗口縁部片である。18は口径11.0㎝を測る。外面に染付を施す。19は口径10.

4cmを測る。外面、内面口縁部に染付を施す。20は口径10.6cmを測る。内側口縁部に模様を施す。21は口径10.6cmを測る。外面に模様を施す。22は口径7.2cmを測る。底部から曲折し真っすぐに立ち上がる。外面に模様を施す。

ＳＫ－２（図14）

23は高台径3.0cmを測る陶器底部片である。高台部は削り出しで内外面に釉薬を施す。

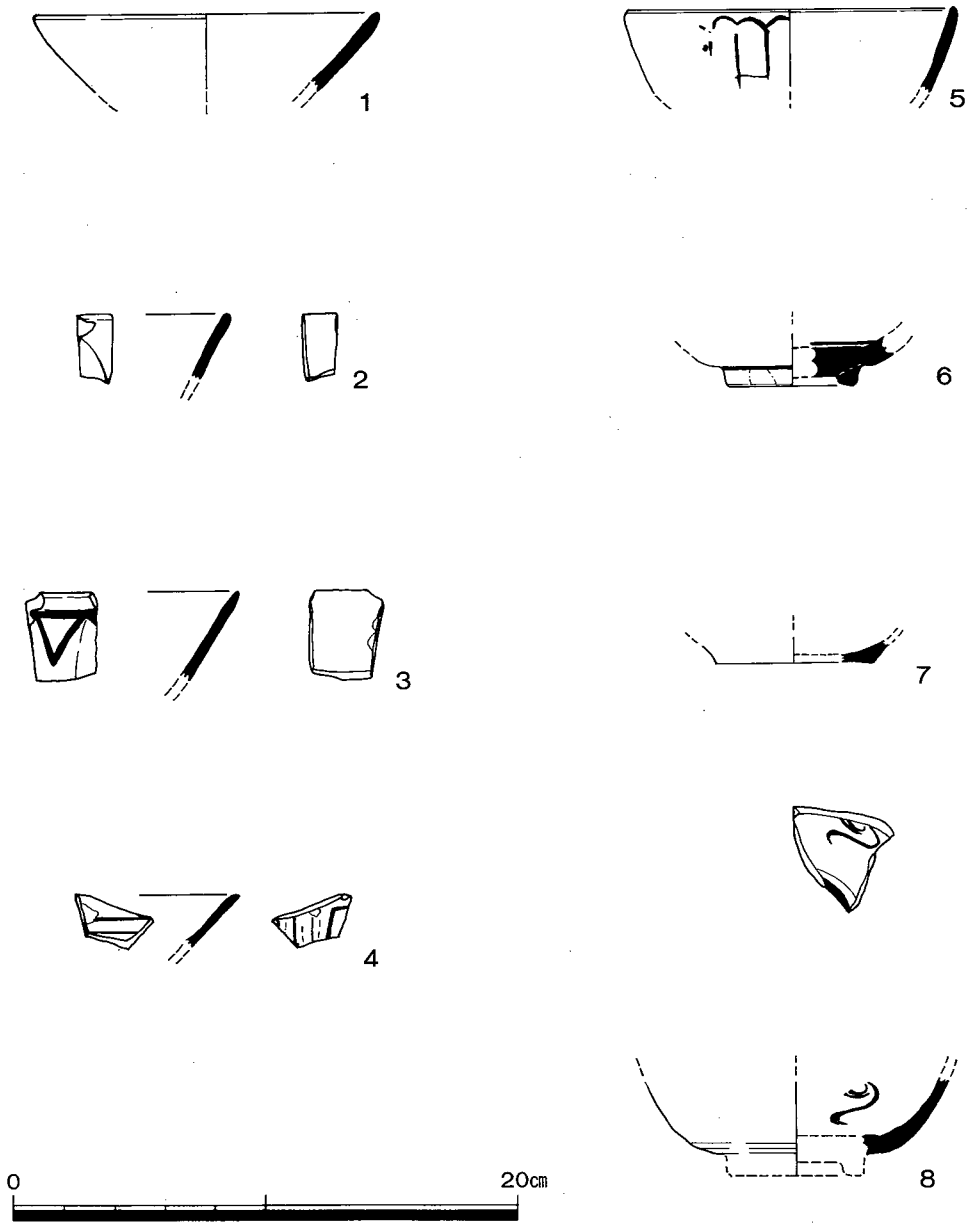


図12. 表　　磁

ＳＫ－３（図14）

24は口径11.0cmを測る磁器碗口縁部片である。外面に模様を施す。

ＳＤ－１（図14）

27は口径11.4cmを測る陶器燈明皿である。内面に釉薬を施す。但し、この遺物は溝上部包含層からの混入の可能性が極めて高いということを明記しておく。

ＳＤ－20（図14）

26は口径10.4cmを測る磁器小皿である。内外面に釉薬を施す、色調は内面白灰色、外面淡緑色を呈する。

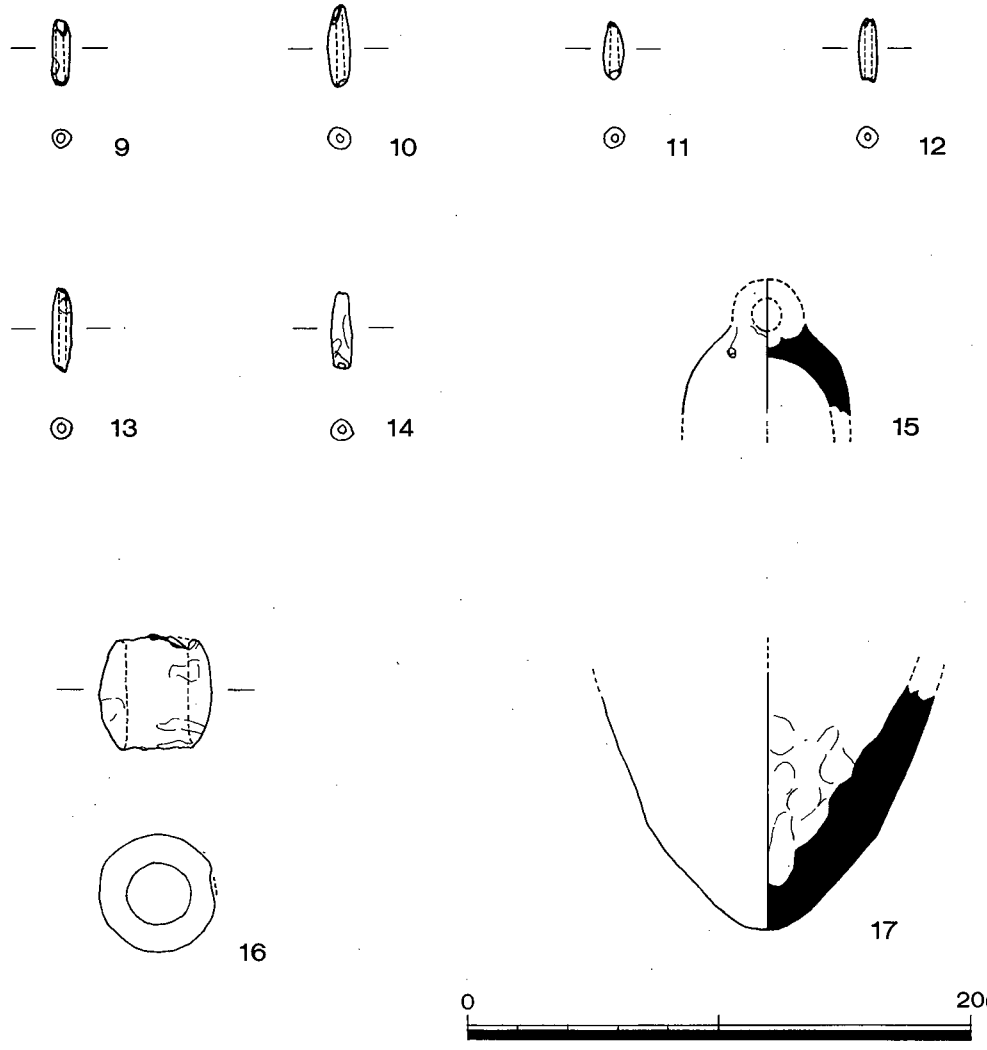


図13. 漁　撈　具

ＳＸ－４（図14）

28は口径5.2cmを測る瓦器椀底部片である。内面にミガキ調整を施す。

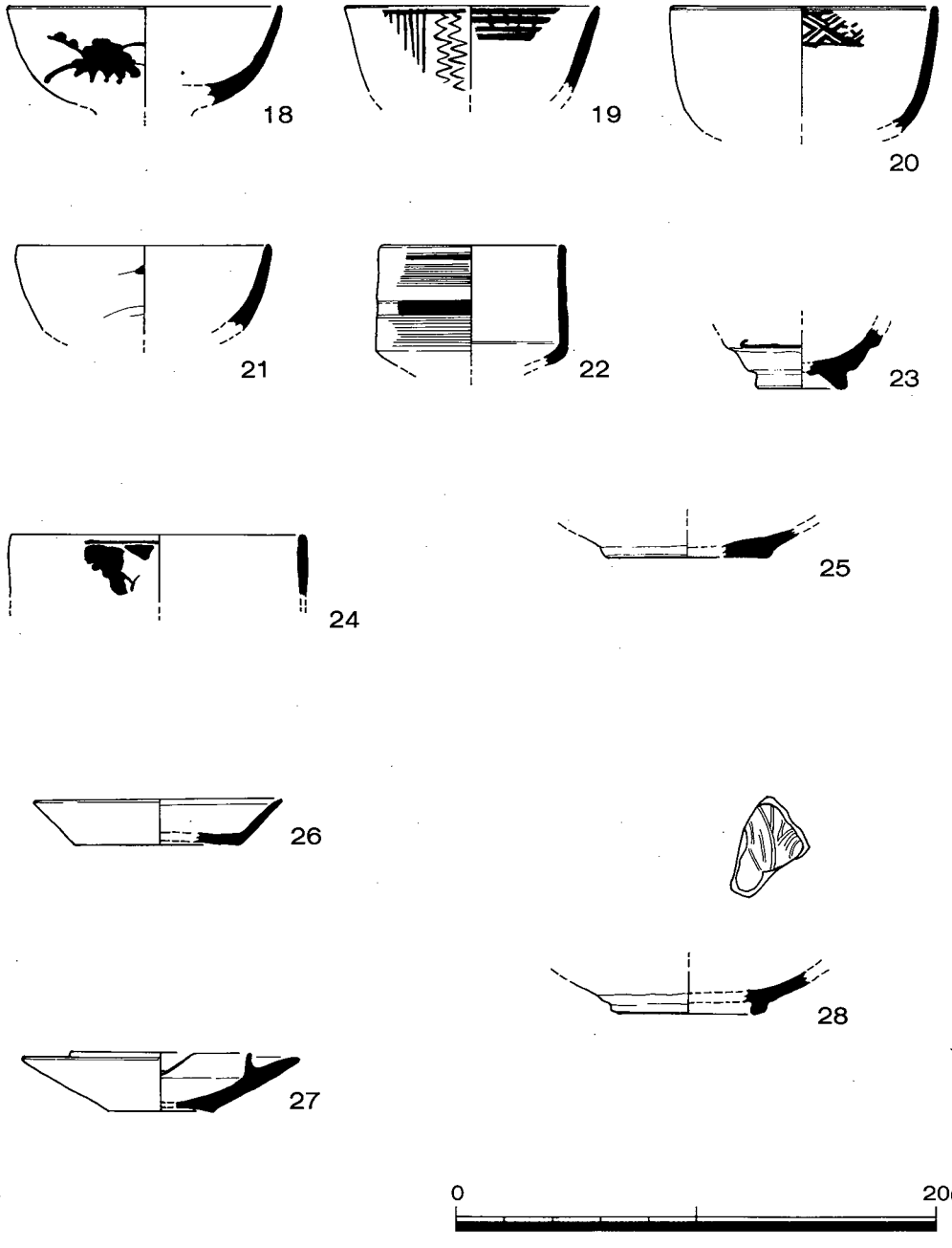


図14. SK—1(18～22),SK—2(23),SK—3(24),SD—1(27),
SD—20(26),Pit—2(25),SX—4(28) 出土遺物

Ｐｉｔ－２（図14）

25は底部径7.0cmを測る土師器底部片である。

包含層第３層（図15）

29～32は土師器小皿である。29は口径7.0cmを測る。30は口径6.8cmを測る。31は口径8.4cmを測る。32は口径8.8cmを測る。

33～37は瓦器小皿である。33は口径7.8cmを測る。34は口径8.2cmを測る。35は口径7.6cmを測る。36は口径8.4cmを測る。37は口径9.0cmを測る。

38～42は瓦器椀である。38は口径11.6cmを測る。39は口径11.0cmを測る。40は口径13.8cmを測る。41は口径13.6cmを測る。42は口径不明で、器壁は比較的厚くかなり大きいものであると考えられる。

43・44は陶器である。43は高台径3.4cmを測る茶碗でほぼ全面に釉薬を施す。44は底部片である。

45は、口径不明の土師質鉢口縁部片である。

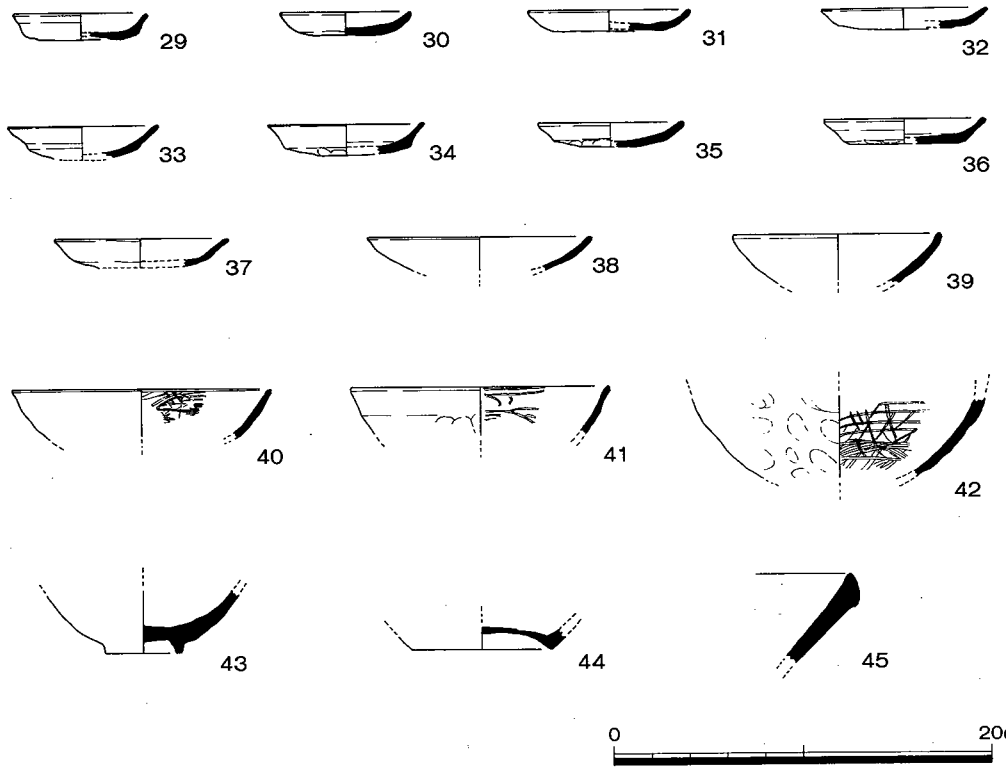


図15. 包含層第３層出土土器

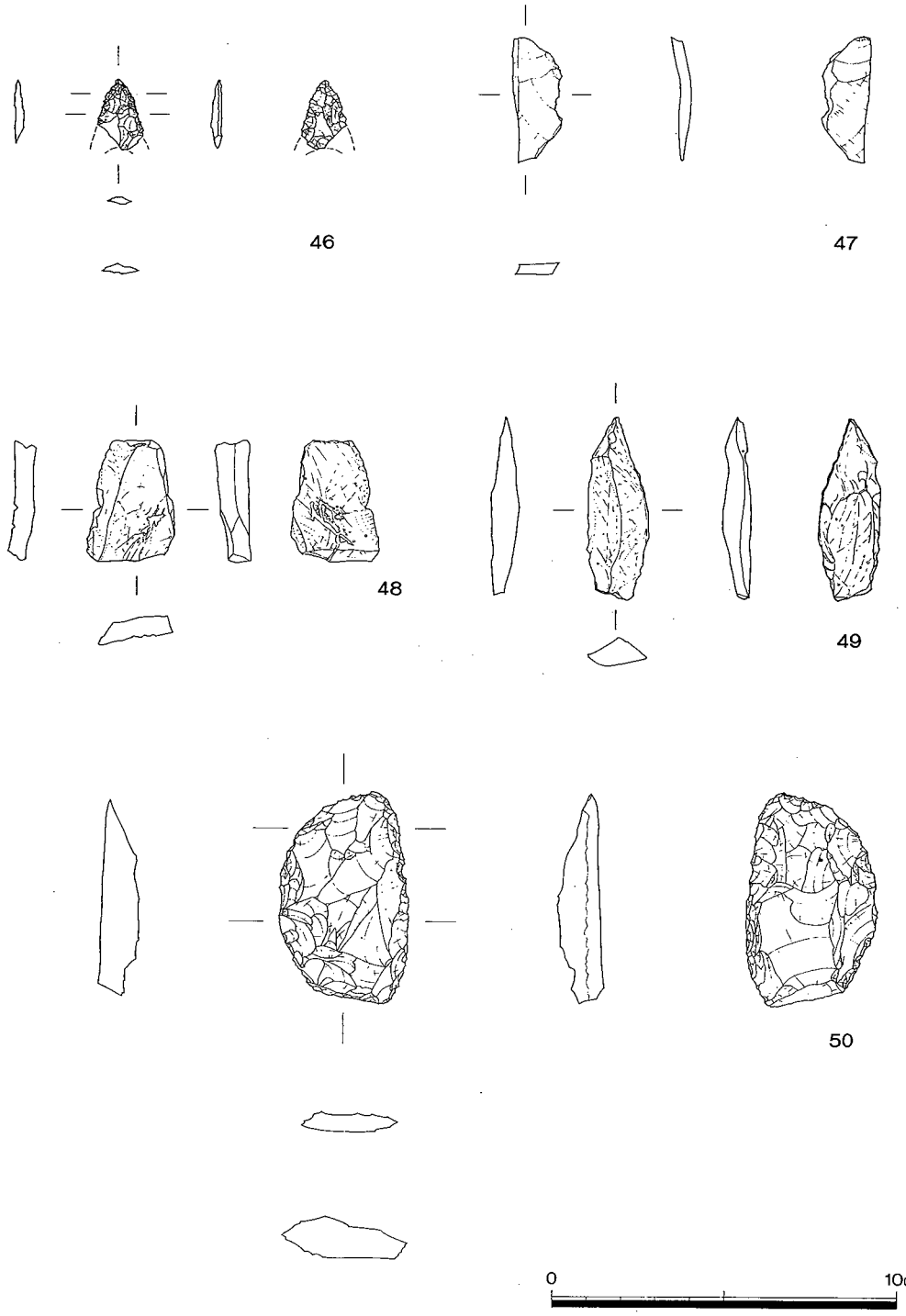


図16. 石　　器

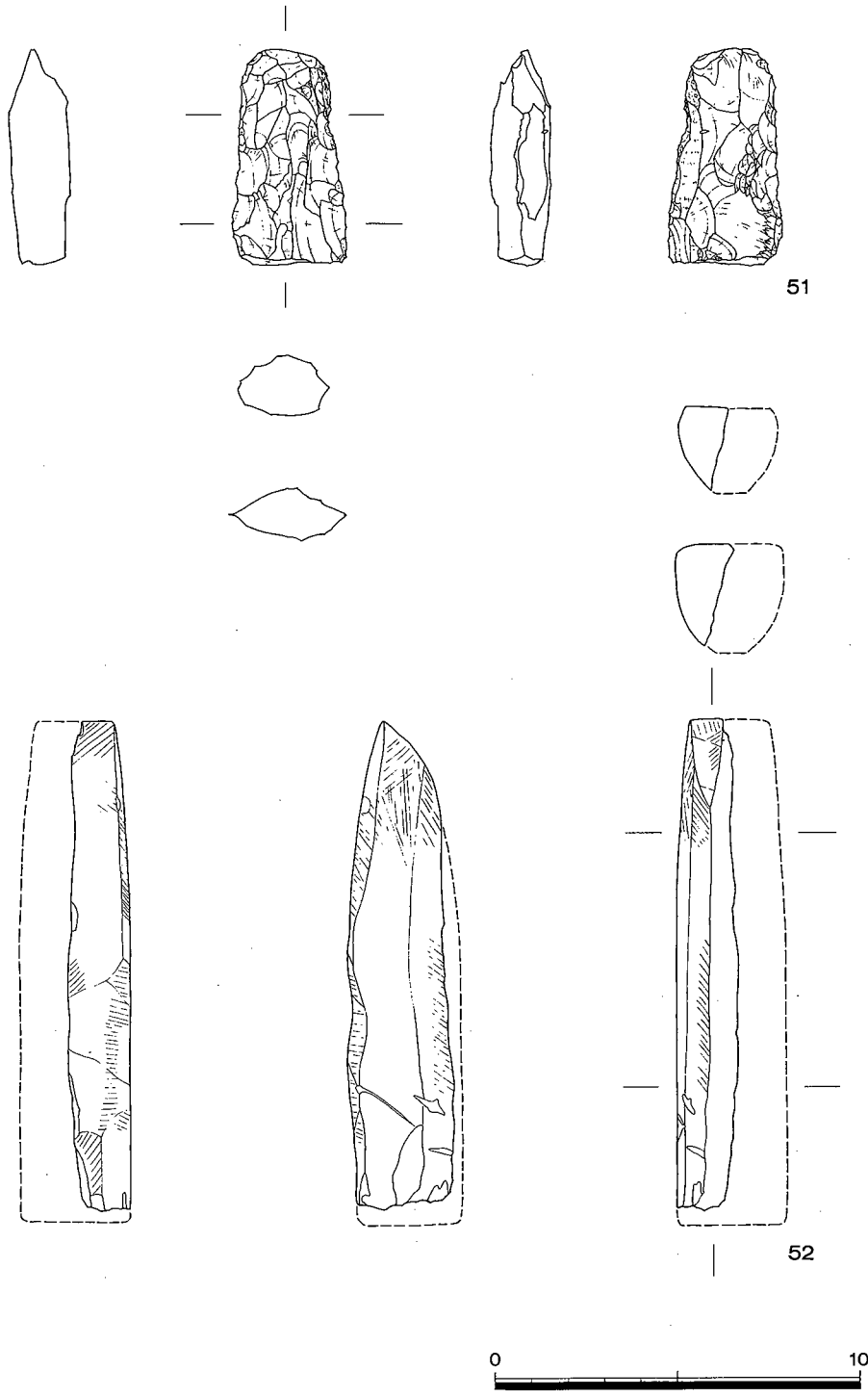


図17. 石　　器

石器（図16、17、図版12）

石器は包含層からの出土が多く遺構からの出土はほとんど見られない。ほとんどがサヌカイト製であるが一部緑色片岩製のものも出土している。以下主なものについて概要を示す。

46は、凸基無茎石鏃である。逆刺は両方欠失している。両面共に両側辺よりやや粗い調整剥離を施す。

47は長さ3.6cmを測る剝片である。48は長さ3.5cm、厚さ0.5cmを測る剥片である。

49は長さ5.2cmを測るナイフ型石器である風化が激しく刃部も丸みを帯びる。

50は長さ6.1cmを測るスクレイパーである。粗い調整剝離を施す。

51は石斧である。長さ5.9cm、幅約３cm、厚さ1.6cmを測る。一部風化部分が残る。調整剝離は粗雑である。先端部に使用痕が認められる。

52は抉り入り柱状片刃石斧である。緑色片岩製で長さ13.5cmを測る。使用時に割れたのであろうか半分が欠失している。弥生時代のものである。

２．第２区

本調査区では弥生時代から中世にかけての遺物が出土した。遺構内出土のものはきわめて少なく、その大半が遺物包含層からの出土であり、中世の遺物が中心となっている。

以下、主なものについてその概要を示す。

ＳＤ－238（図18、図版13）

53～57は溝の中央部周辺、上層の粘土より出土した弥生土器である。

53は壺頸部である。内外面共に保存状態不良のため調整は不明、頸部径約11.2cmを測る。

54、55は壺底部である。54は底部径約８cmを測り、底部外面はやや凹む。55は底部径約８cmを測り、平底から体部は立ち上がる。54、55共に保存不良のため調整は不明。

56、57は甕底部である。56は底部径約5.4cmを測る。57は底部径約6.2cmを測り、下方に広がる底部より体部は外反し立ち上がる。56、57も保存不良のため調整不明。

53以外はまとまって出土した。調整不明瞭なため時期決定に問題を有するが、前期末から中期初頭頃のものと思われる。

ＳＤ－241（図19）

58は土師器小皿である。体部はゆるやかに内湾し、口縁部は外反する。内外面にヨコナデを施す。復元口径約8.1cm、高さ1.6cmを測る。

ＳＤ－243（図19）

59は土師器小皿である。底部はほぼ平らであり、体部から口縁部にかけてはやや外反しながら短く立ち上がる。体部から口縁部にかけてはヨコナデ、底部内面はナデを施す。底部外面は糸切りの痕跡は残っていないが、糸切り後ナデを施すものと思われる。復元口径約10.2㎝、高さ1.2㎝を測る。

包含層第４層（図19）

第4層の出土遺物量は第3層の 1/10 以下であり、図示できるものも非常に少ない。

60、61は瓦器椀片である。60は復元口径15.2㎝を測る体部片である。保存不良のため調整は不明確だが、口縁部はヨコナデを施す。61は復元高台径6.4㎝を測る底部片である。高台は外に広がりのび、端部丸くおさめる。保存不良のため調整不明確だが、高台にナデを施す。

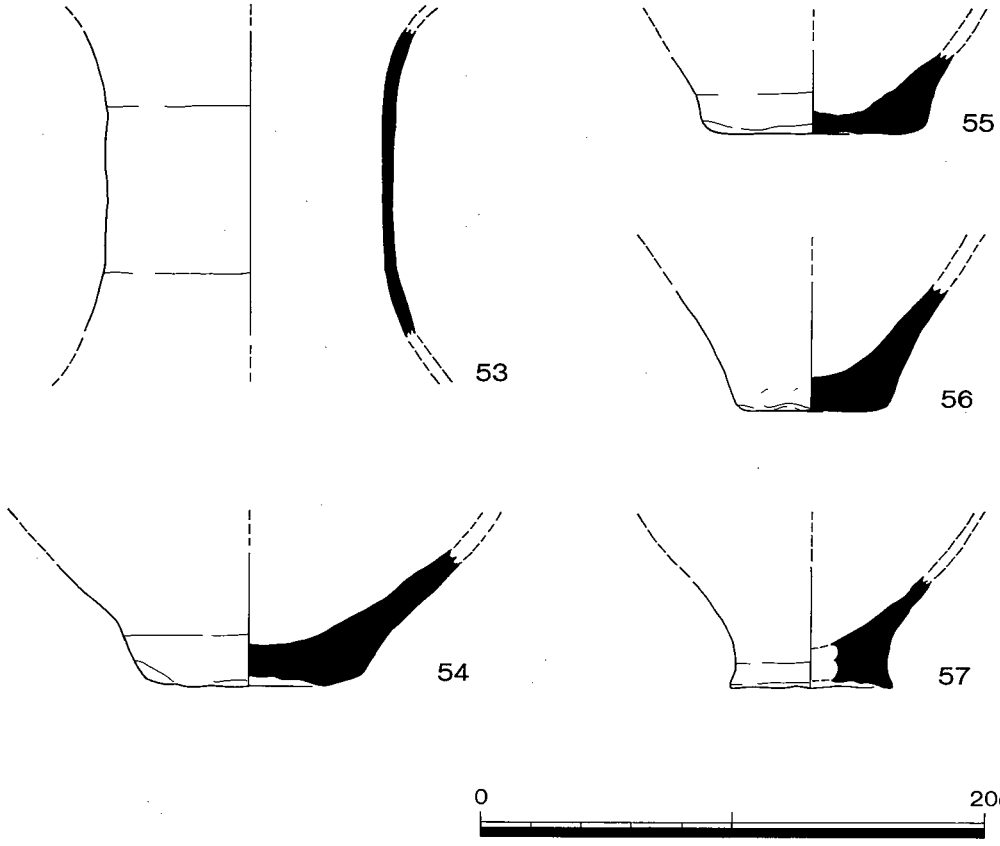


図18.ＳＤ－238 出土土器

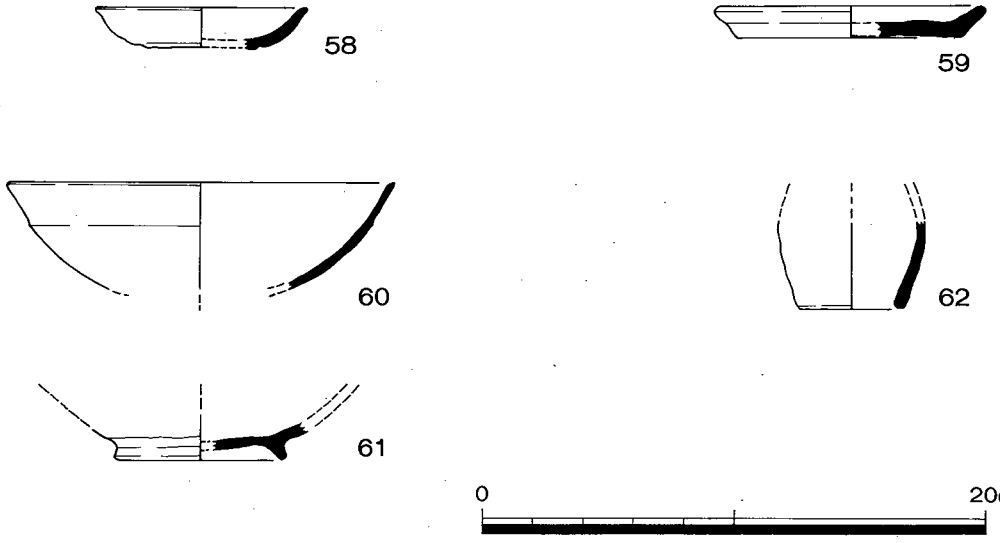


図19. SD—241 (58), SD—243 (59), 包含層第4層 (60～62) 出土土器

62は須恵器たこ壺である。つり鐘形のたこ壺であり、口縁端部を丸くおさめる。内面から口縁部外面はヨコナデ、体部外面はナデを施す。復元口径4㎝を測る。

包含層第3層（図20、21、22、図版13）

63～68は瓦器椀片である。63、66は内外面共に調整不明。64は内面ミガキ、外面指オサエを施す。65は口縁内面に沈線1条がめぐり、内面ヘラミガキ、外面指オサエ後粗いミガキを施す。67は内面ミガキ、外面指オサエを施す。復元口径は、63が12.6㎝、64が12.2㎝、65が15㎝、66が13.2㎝、67が14.2㎝、68が17.1㎝を測る。

69～78は瓦器椀底部である。復元径3.4～6㎝を測る弱い高台が付き、見込み部ミガキが斜格子文（73、75、77、78)、平行線文（74)、ラセン状文（76）などがある。

79～82は瓦器小皿である。79は外面指オサエ、内面ナデを施す。復元口径7.2㎝、高さ1.5㎝を測る。80は復元口径7.9㎝、高さ1.4㎝を測る。81は復元口径8.4㎝、高さ1.9㎝を測る。82は見込部にミガキを施し、復元口径7.6㎝、高さ1.8㎝を測る。

83～90は土師器小皿である。復元口径6.7～10.4㎝、高さ1～1.8㎝を測る。

91、92は土師器皿である。91は復元口径12.5㎝を測り、内面調整は不明、外面横位ナデを施す。92は復元口径14.8㎝を測り、口縁部は外反する。内面から外面にかけてヨコナデを施す。

93は土師器底部片である。内面はナデ、外面横位ナデを施す。底部外面は糸切りと思われるが明確ではない。

94は須恵器甕口縁部と思われる。復元口径19cmを測る。

95は須恵器壺と思われる。外面に１ヵ所つまみ状の突起を有し、外面は自然釉がかかる。内面は縦位ナデを施す。

96は須恵器こね鉢である。復元口径26.4cmを測り、口縁外面は黒灰色を呈す。

97は須恵器こね鉢底部である。

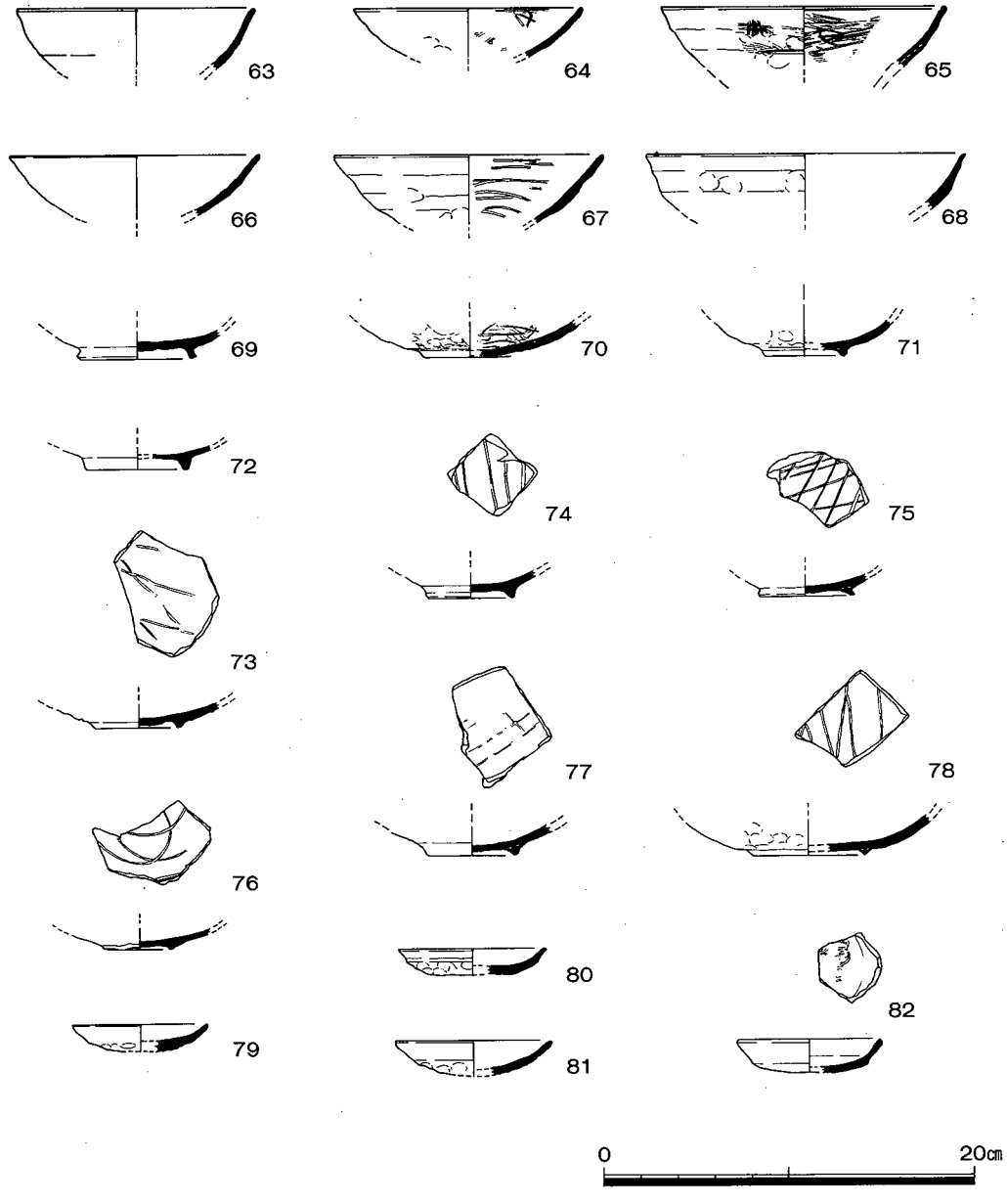


図20. 包含層第３層出土土器

98は須恵器壺と思われる。中央部に沈線２条がめぐり、内面縦位ナデ、外面回転ナデを施す。

99は平瓦片である。厚さ約２㎝を測る。

100～103は土師器羽釜である。100、101は「く」の字を呈する口縁部を有し、102は大きく屈曲、紀伊型と思われる。復元口径は、101が33㎝、102が27.6㎝を測る。

104、105は土錘である。104は土師質で、長さ約3.5㎝を測る。105は瓦質で、直径約4.2㎝を測る。

陶磁器（図23、図版14）

非常に多くの磁器等が出土したが、いずれも細片となっている。青磁、白磁の碗が主体となっており、図示し得たものについて記す。

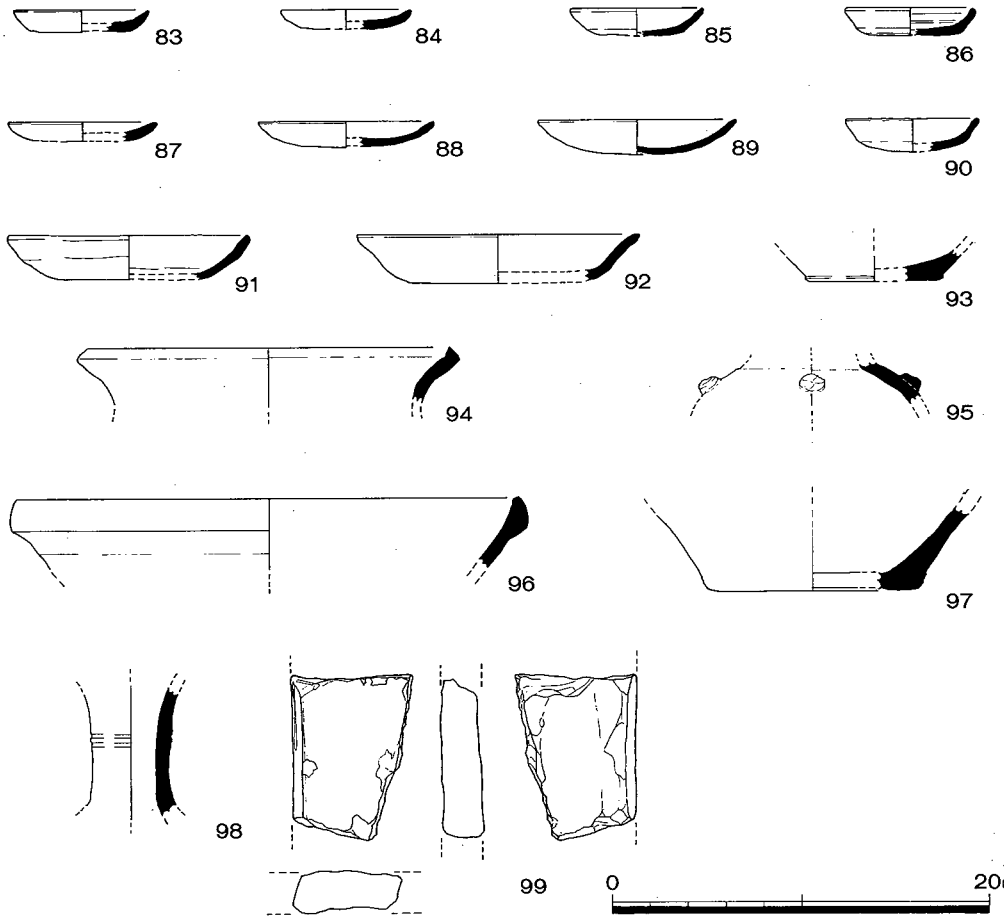


図21. 包含層第３層出土遺物

106～108は青磁碗である。106は外面に片彫りの沈線を施す。108は内面はクシ状及びヘラによる花文、外面クシ状文を施す。同安窯系のものである。109～111は底部片であり高台及び内部は露胎である。文様は認められない。

112～126は白磁である。

112は碗である。口縁部を外反させる。無文である。113～115は皿である。113、115は底部は露胎であるが114は施釉している。底部だけの細片であるため詳細は不明だが、無文のものである。116～123玉縁を有する碗である。116～121は大きな玉縁を有し、122、123は小さいものである。釉の色調は黄色、緑色がかった白灰色である。復元口径は、

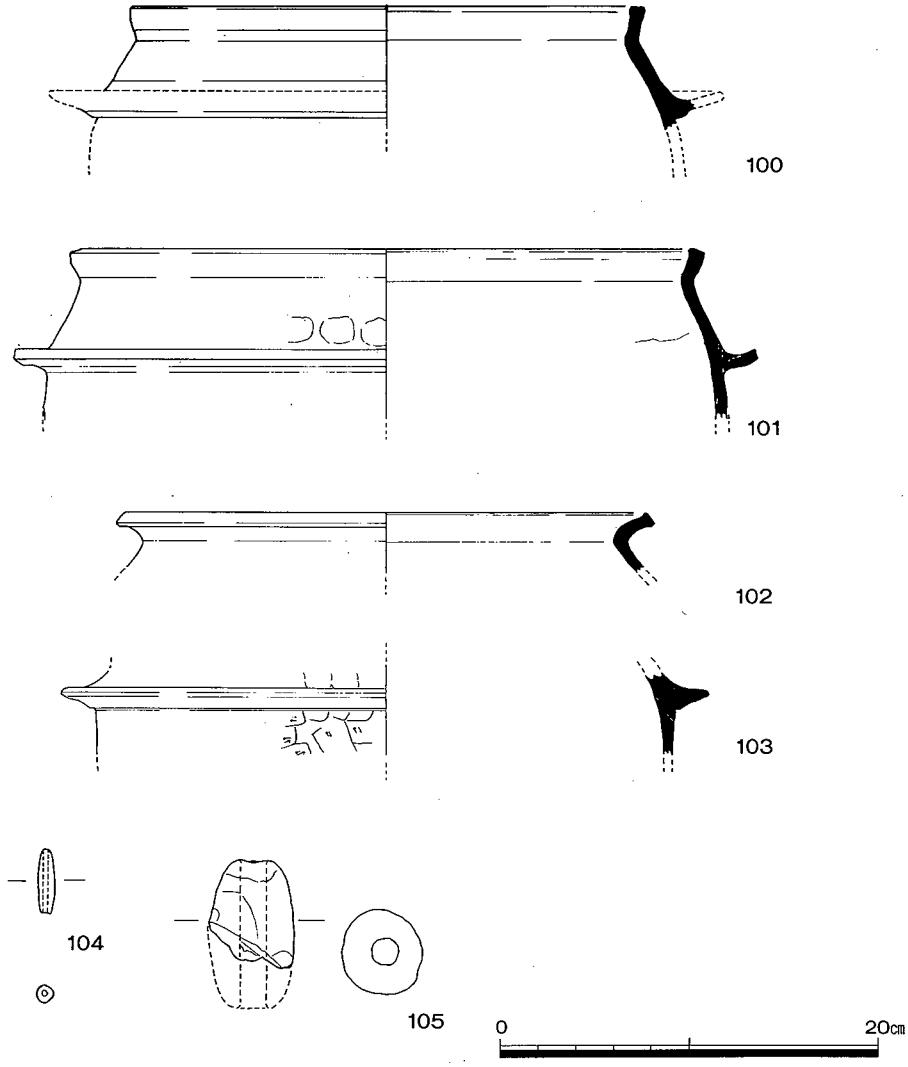


図22. 包含層第3層出土遺物

116・17.2㎝、117・16.2㎝、118・16.3㎝、119・15㎝、120・16.3㎝、121・16.2㎝を測る。124、125は碗口縁部である。無文である。126は底部である。高台及び内部は露胎である。

127は天目碗である。体部外面下部は露胎であり、その他は黒釉がかかる。

出土層位は、第4層119、125、126、第3層107、108、112、113、115～118、121～124、側溝掘削111、機械掘削時110、120、127、表面採取106、109、114である。

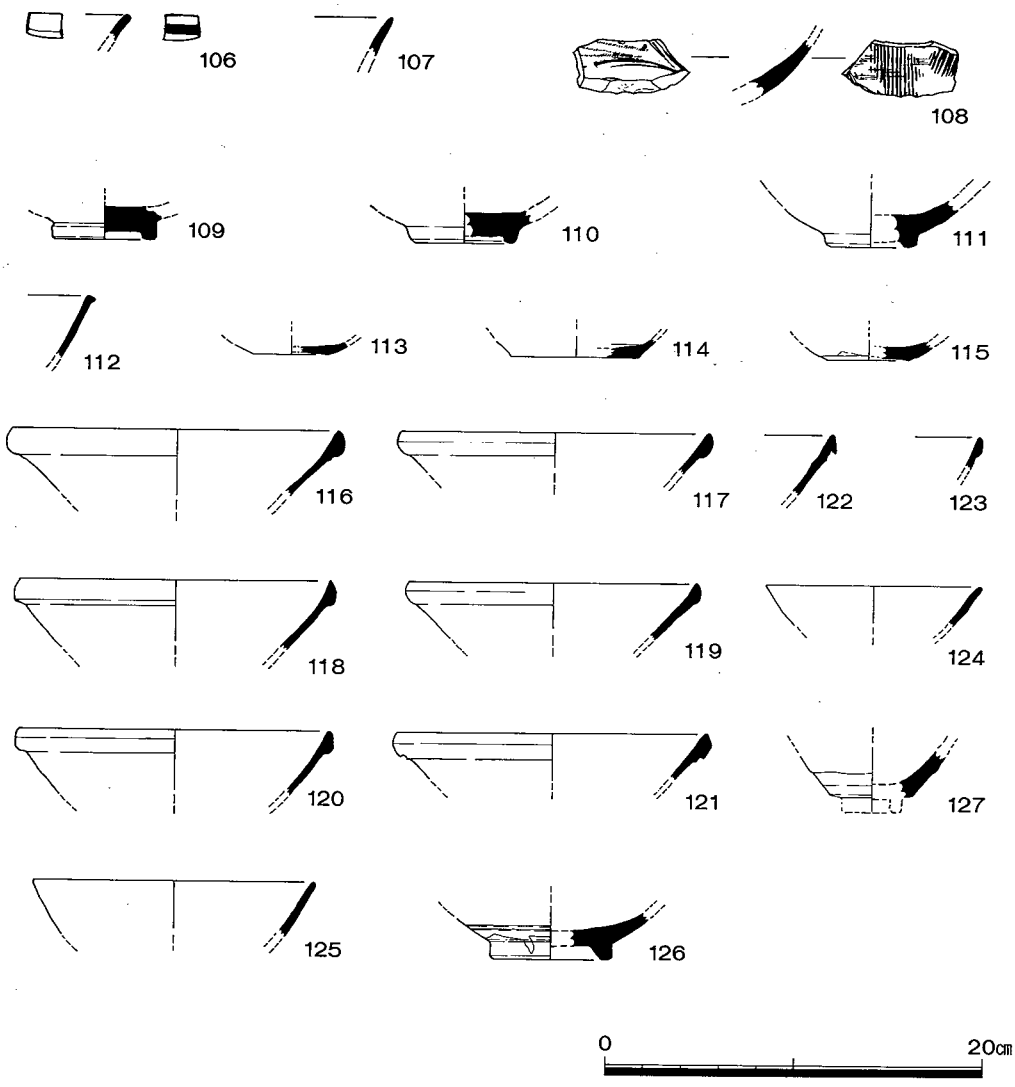


図23. 陶　磁　器

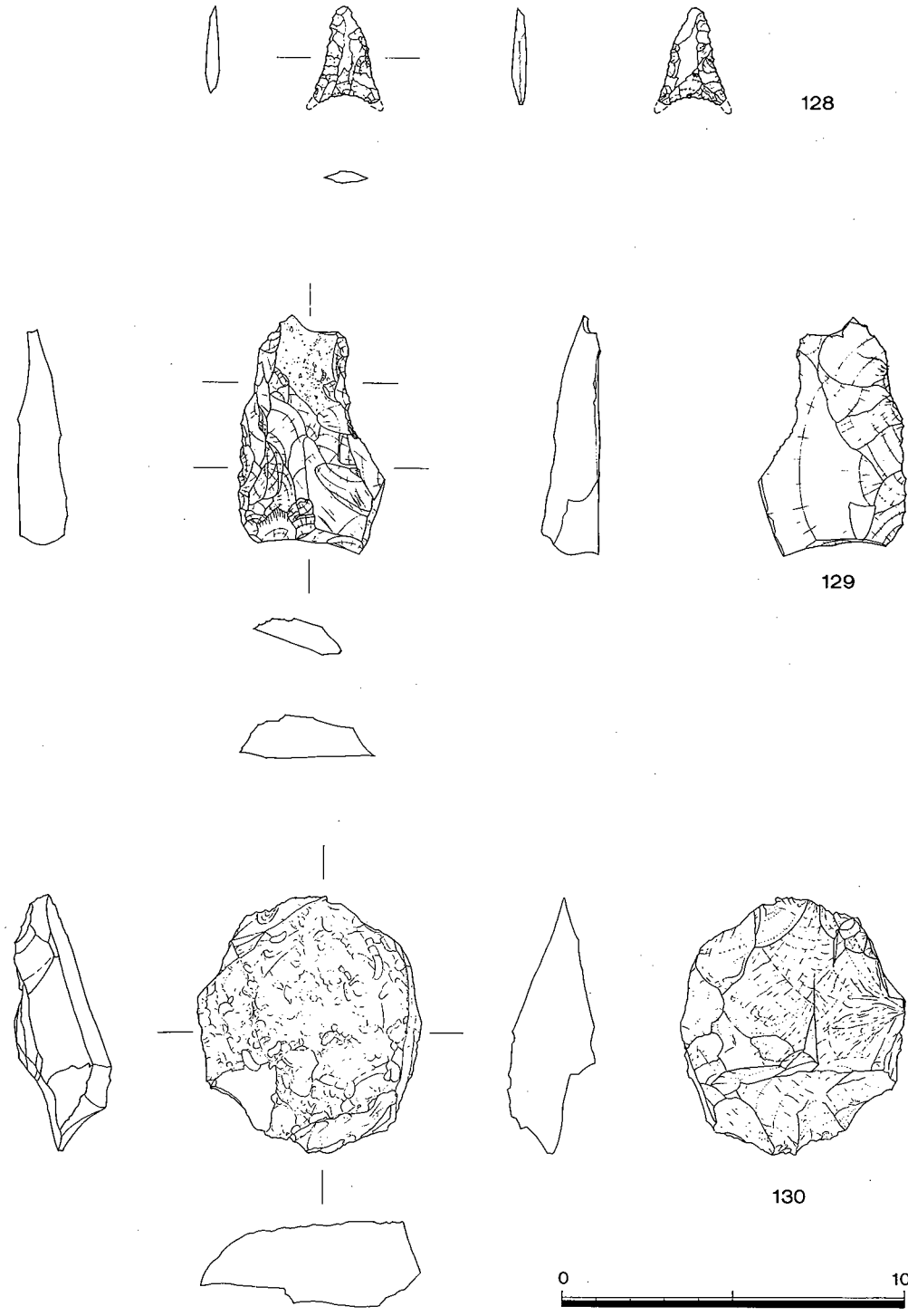


図24. 石　　器

石器（図24）

128は凹基式のサヌカイト石鏃である。両面共に側方より調整剥離を施す。右側面は粗く、左側面は細かい。断面はレンズ状を呈す。第4層出土。

129、130はサヌカイト石核である。129は左側面上部に自然面を有するものの、他の部分には粗い剥離を有する。130は左側面のほぼ全面が自然面であり、右側面は大剥離面を有す。129は第4層出土、130は第3層出土である。

第4章　まとめ

今回の調査は制約の多いものであったが、多くの成果が得られた。既存の工場建設時に大幅な削平を受けていたにもかかわらず4時期にわたる遺構群を検出し、沢地域の歴史的変遷を明らかにするための資料が得られた。

以下各時代毎にまとめる。

1）今回の調査で最も古く溯るものはスクレイパー等の石器が挙げられる。これらはいずれも後世に形成された包含層から少量出土したのみであり、本遺跡の縄文時代について積極的に論じるわけにはいかないが、遺跡の成立期についての手掛りは得られたと伝えよう。

2）遺構が存在するのは弥生時代になってからである。第2区のほぼ中央にて検出したSD－238である。流れは地形の高低にそっており、幅の割に深さが非常に浅く人為的な溝とするにはやや問題がある。最後に堆積した埋土中から前期末から中期初頭と思われる土器が出土し、埋没時期は押えられるが、開口時期は明らかではない。他に当時期の遺構は検出できず、包含層より石器等が出土したのみであるので、本溝の性格を明らかにすることは難しい。

だが、もう少し広範囲に視野を広げると、本遺跡の北250mには弥生時代前期末頃の集落跡と考えられる沢遺跡が存在する。沢遺跡は昭和61年の調査で前期末頃の集落跡の西端と思われる部分を明らかにし、溝、土坑等を検出した。出土土器の遺存状態は不良であり、出土量も少ないため、時期を明確に判定しにくいが、明らかに中期、後期まで下る土器はなく、少なくとも中期初頭までの集落であることは明らかである。

沢西遺跡と直接の関係を示す物証は得られていないが、時期が近いこと、沢遺跡の生業範囲などを考えると、現時点では2つの集落とするよりは、同一集落範囲とした方が妥当であろう。いずれにしても、海岸部の弥生時代については本調査を含め2例しかなく、今後の調査が待たれる。

3）古墳時代から奈良時代にかけての遺構は本調査地ではまったく検出できず、中世の包含層より遺物が少量出土したのみである。したがって、当時期の様相については不明としか云えないが、遺物の保存状態は良好であるので、当地域及び周辺に遺構等が存在した可能性は高いと思われる。

4）遺構が良好に遺存するのは平安時代になってからと思われる。第１区１、２区から３、４区西半にかけて、溝、性格不明遺構等が、第２区黒褐色系埋土のスキ溝群が挙げられる。第２区のスキ溝が群としてとらえられる以外は方向も一致せず、地形による制約を受けているとしても、まとまりに欠ける。さらに、遺構がスキ溝等の小規模のものであるため出土遺物が少なく、時期も明確にできない状況である。しかし、瓦器を含まず、黒色土器椀等を含んでいること、土師器の小皿が10世紀頃のものとみられることから、一応、現状では平安時代後半頃の遺構と認識せざるを得ない。したがって、これらの遺構は同時期に並在したものではなく、時期差があるものと思われる。

5）本調査で遺構が最も顕著となるのは中世になってからである。削平を受けている第１区南西部を除いて第１、２区ほぼ全面にて検出した。第１区では掘立柱建物一棟を検出したものの、その他については、溝、スキ溝が大部分を占め、農地的様相が強い。第２区は溝、スキ溝で構成されており、集落的な様相はまったくない。

第１区と第２区の遺構の関連については方向など一致せず、直接的な関係は不明であるが、それぞれの調査区内ではまとまりがある。

第１区は掘立柱建物廃絶後、建物棟方向に一致したスキ溝が出現し、以後農地として利用されていたことが読み取れる。

第２区は大まかに４時期に分けられる。調査区東部に道状の並行して流れるＳＤ－201、202が掘られ、次にほぼ同じ地域においてこれらに直交するスキ溝が掘られている。その次にＳＤ－201の東側にこの溝と同方向のスキ溝群が掘られ、最後に、調査地東部に北北西～南南東方向と、それに直交する区画溝と考えられる溝群が掘られており、東から西に向かって農地を広げて行った様子が読み取れる。切り合い部分から判断すると、いずれも先の遺構が埋没後に後の遺構が造られており、各時期単独では遺構の数は少ない。

ここで、特徴的なことは、先後関係をもつ遺構が、先の遺構の方向をほぼ踏襲するか、もしくはそれに直交する等の規則性をもっていることである。段丘端部という地形的な制約を受けていることは考えられるが、これだけ何回も開発が加えられているにもかかわらず、規則性をもつということは、地形的な要素以外に条件が存在していたと考えた方が妥当であろう。

出土遺物は大部分が包含層からであり、遺構からの出土は少ない。遺構内出土遺物は細片となっているので時期は不明確であるが、概ね13～14世紀のものである。包含層からは多くの青磁、白磁が出土した。図化できたものだけで29点を数え、時代的にも幅をもつ。

いずれも小片、細片となっているため、これらについて積極的に述べることはできないが、調査地周辺に集落が存在することが考えられる。

6）本調査地の最後は近世である。主なものは溝と粘土採掘坑と考えられるものであり、第1区B・C・D－3、4区にて集中的に検出した。検出地付近は大きく削平を受けている部分であり、他地区では近世の遺構を検出できなかったので、本調査地の近世について明確にすることは困難である。しかし、SD－30は内部に多数の坑が打ち込まれており、他遺跡の検出例から農業用の灌漑溝と思われ、当地が農地として利用されていたことが考えられる。

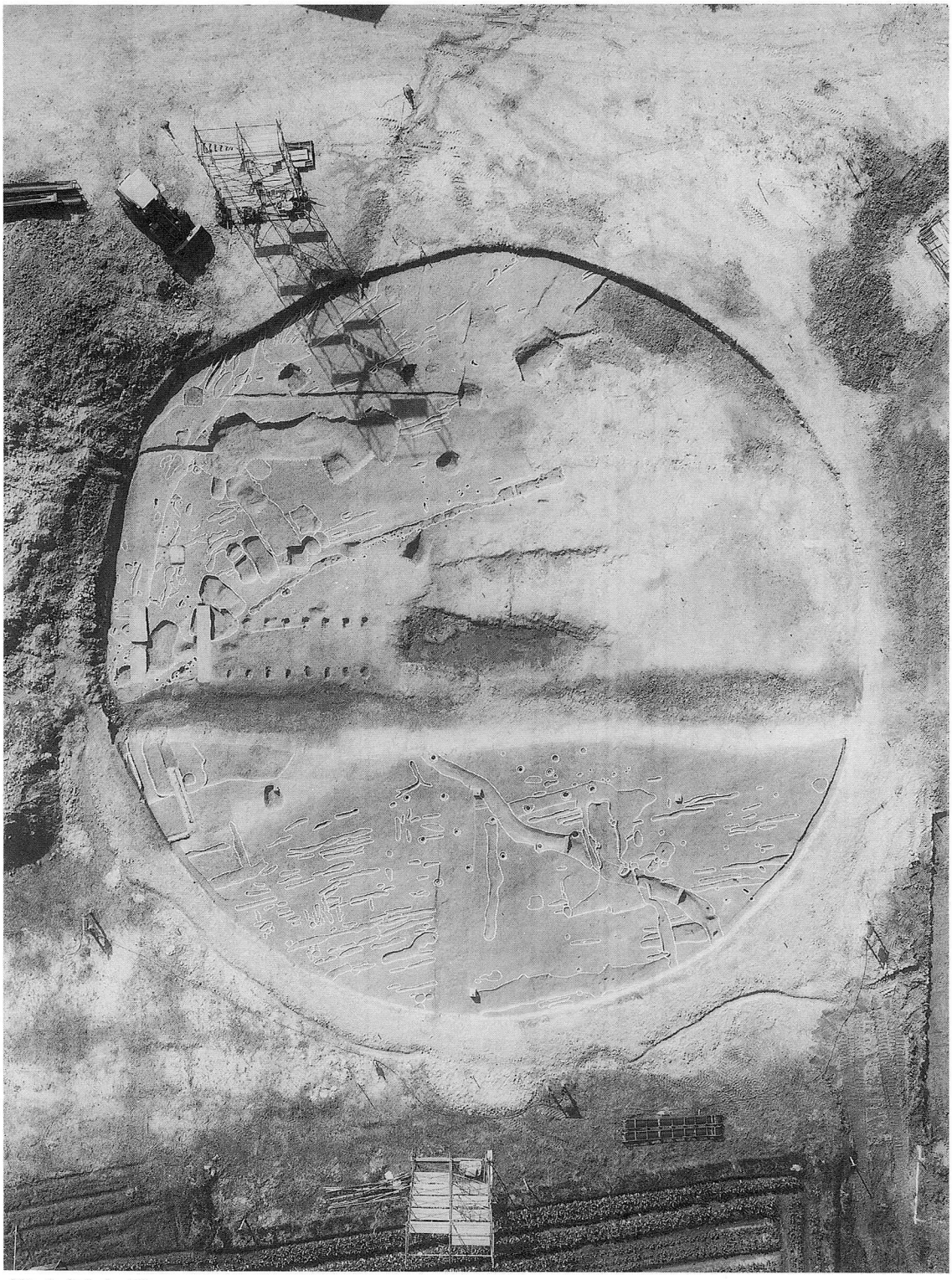
粘土採掘坑は非常に近接して存在し、削平を受けている部分にあるといっても、遺構の深さはいずれも20cm以上あり、調査区内では他に存在しなかった可能性は高い。ただ、状況からは調査区外東側に続いていることが考えられる。

今回の調査は、中世の掘立柱建物が存在した時期以外は農耕関係の遺構を検出し、沢地域の農地開発の一端を明らかにできた。時期的には弥生時代以降近世に至るものであるが、先述の4時期以外の様相は不明としか云えない。

浦田地区から沢地区にかけては、11～14世紀頃の建物等が多数検出されている。しかし、包含層の堆積が薄く、現地表面から地山面までの深さが浅いため、削平を受けている部分が多く、従前の調査では深い遺構を主に対象にし、当地域全面に集落が広がっているように考えられていた。建物、溝、井戸等の集落的な物を調査し、それ以外の調査は十分ではなかった。今回、地山面が浅いにもかかわらず、農耕関連の遺構を多数検出したことの意義は大きい。また、沢地域で3年度実施した調査では、建物密集地内でも耕作跡が存在していることが明らかとなり、集落地と農地が時期ごとに変化していることが明らかとなりつつある。今後、各地点の成果をより緻密に関連づけ、より精度の高い調査が必要である。

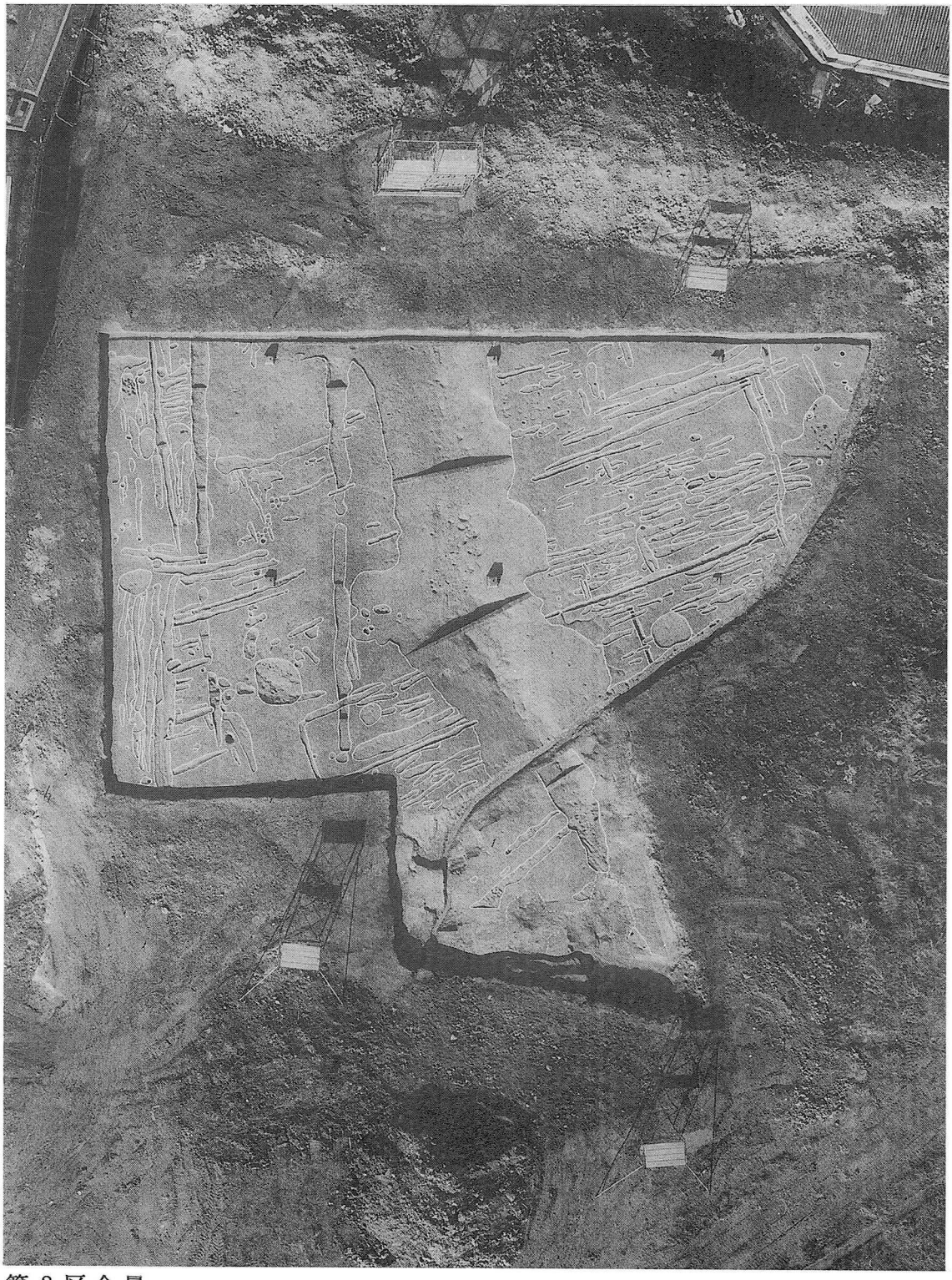
図　　版

図版1　第1区遺構



第1区全景

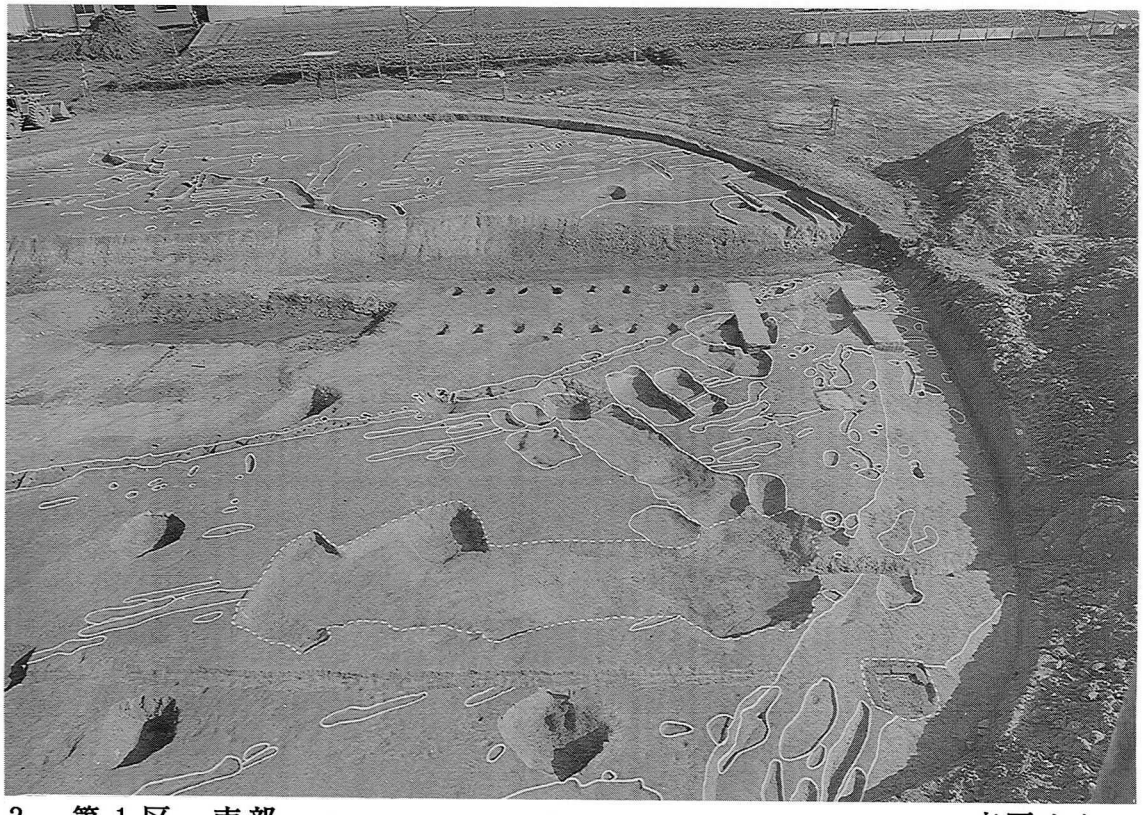
図版2　第2区遺構



第2区全景

図版3　第1区遺構

1．第1区　北部　　西より



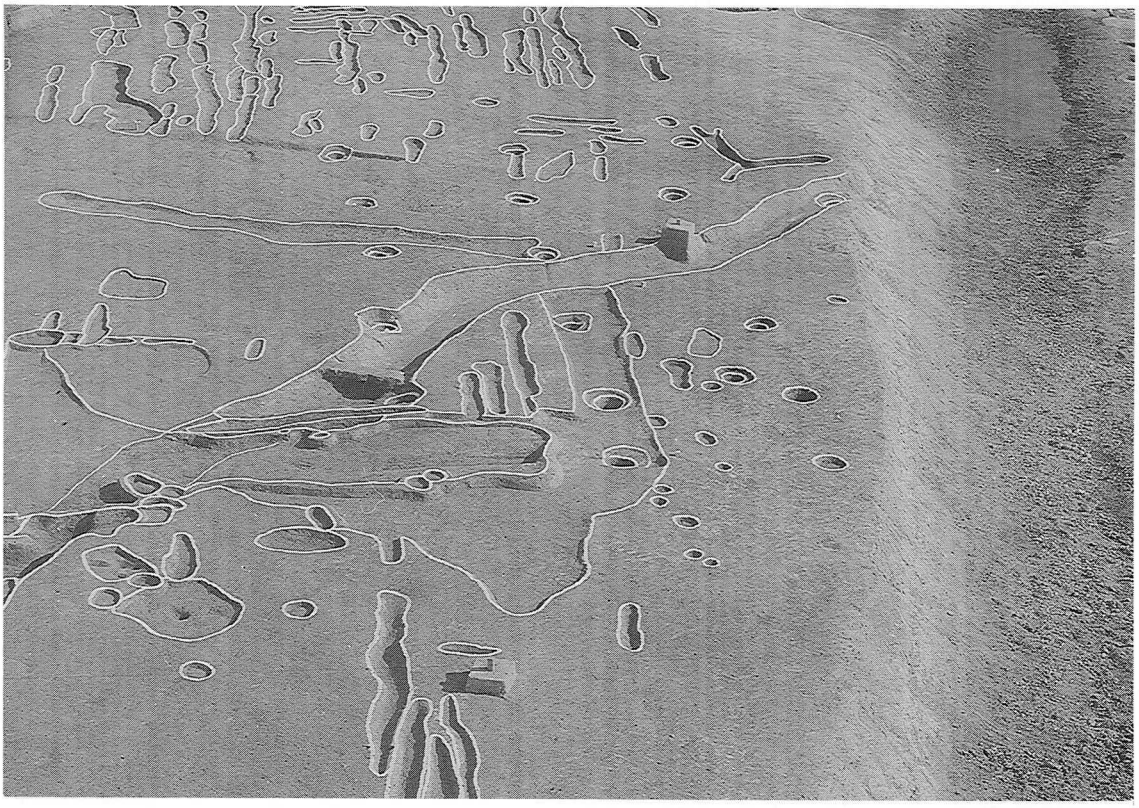
2．第1区　南部　　南西より

図版4　第1区遺構

1．ＳＤ－１　　北東より

2．同　上　　北より

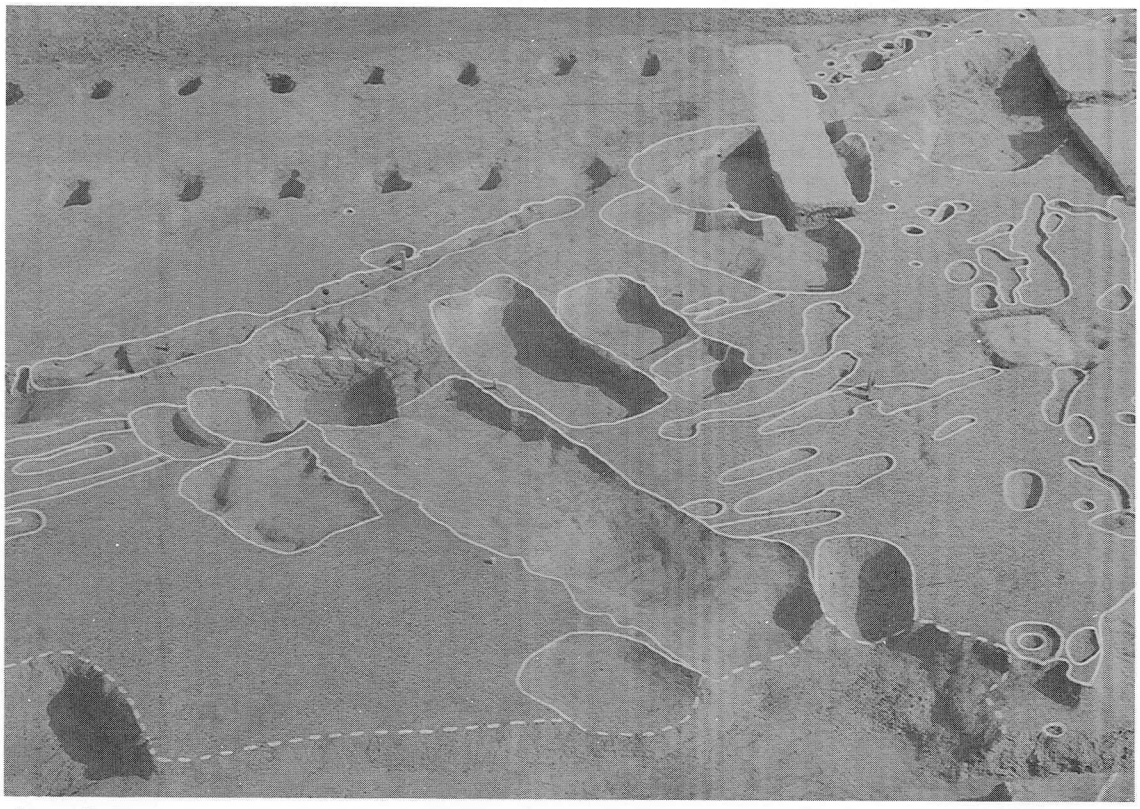
図版5　第1区遺構



1．ＳＢ－１　　北西より

2．同　　上　　北西より

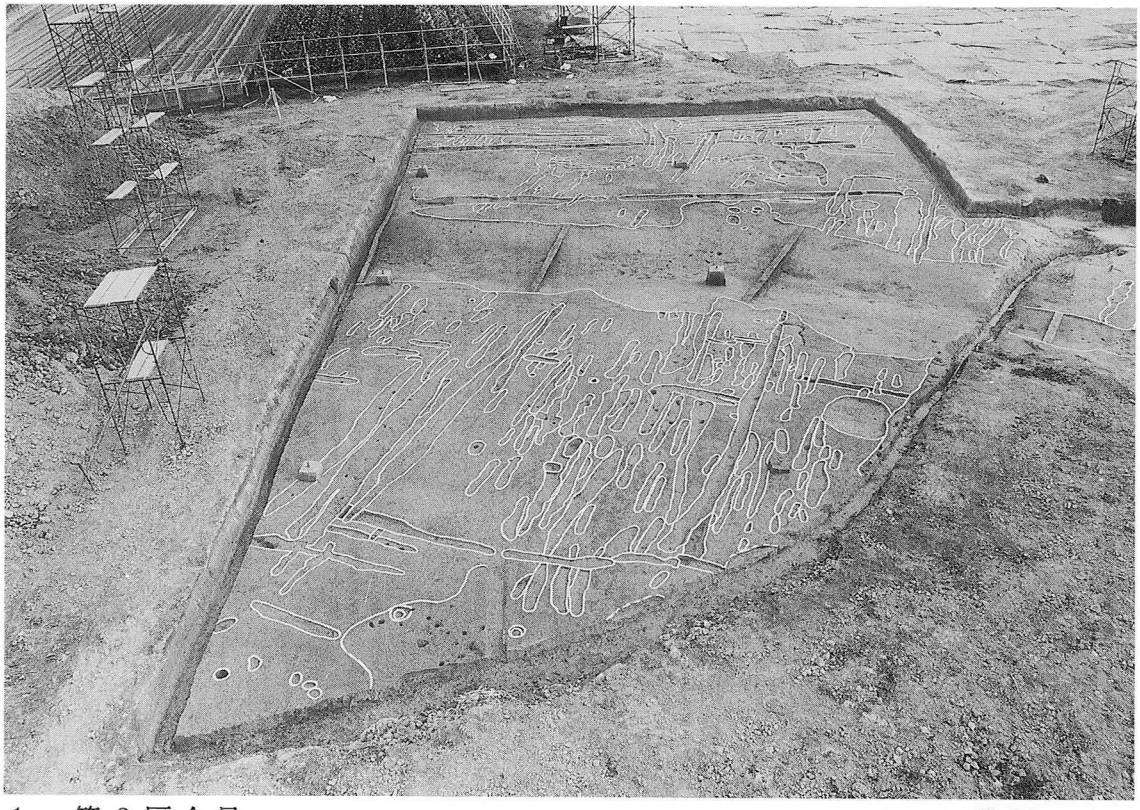
図版6　第1区遺構



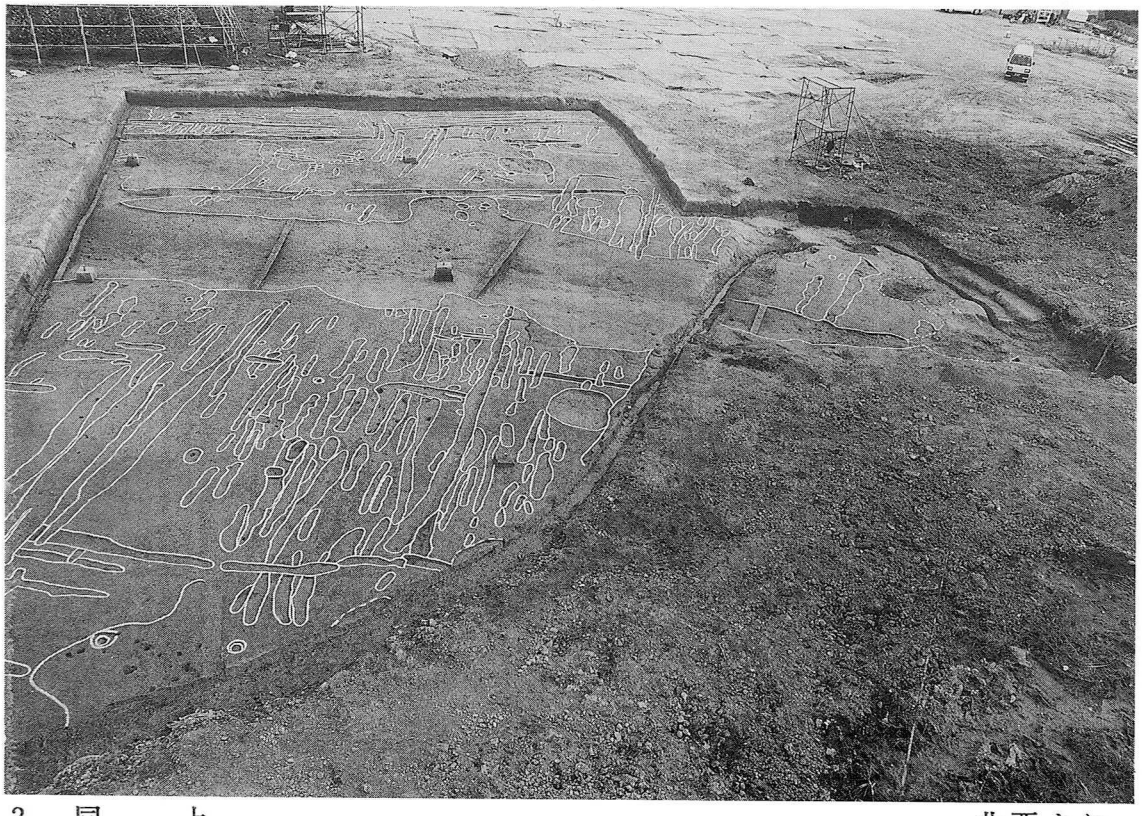
1．ＳＫ－１、ＳＫ－２、ＳＫ－３、ＳＫ－４　　南西より

2．同　　上　　北東より

図版7　第2区遺構

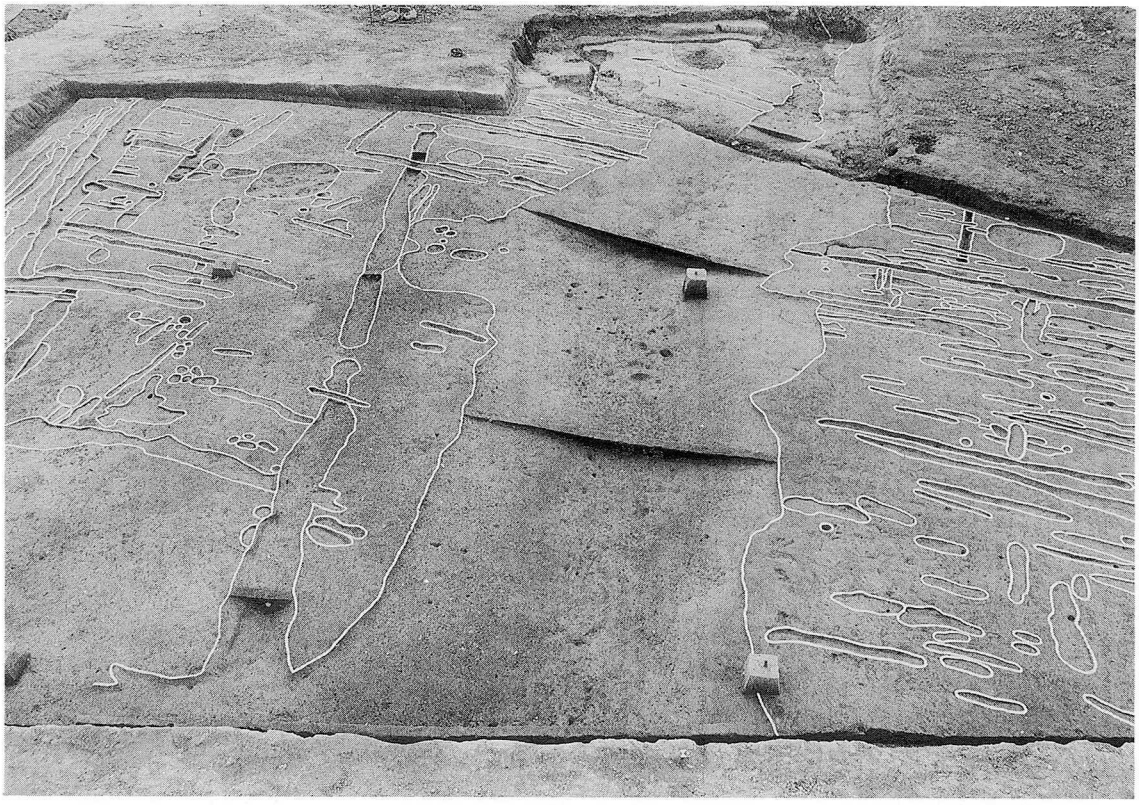


1．第2区全景　　北西より

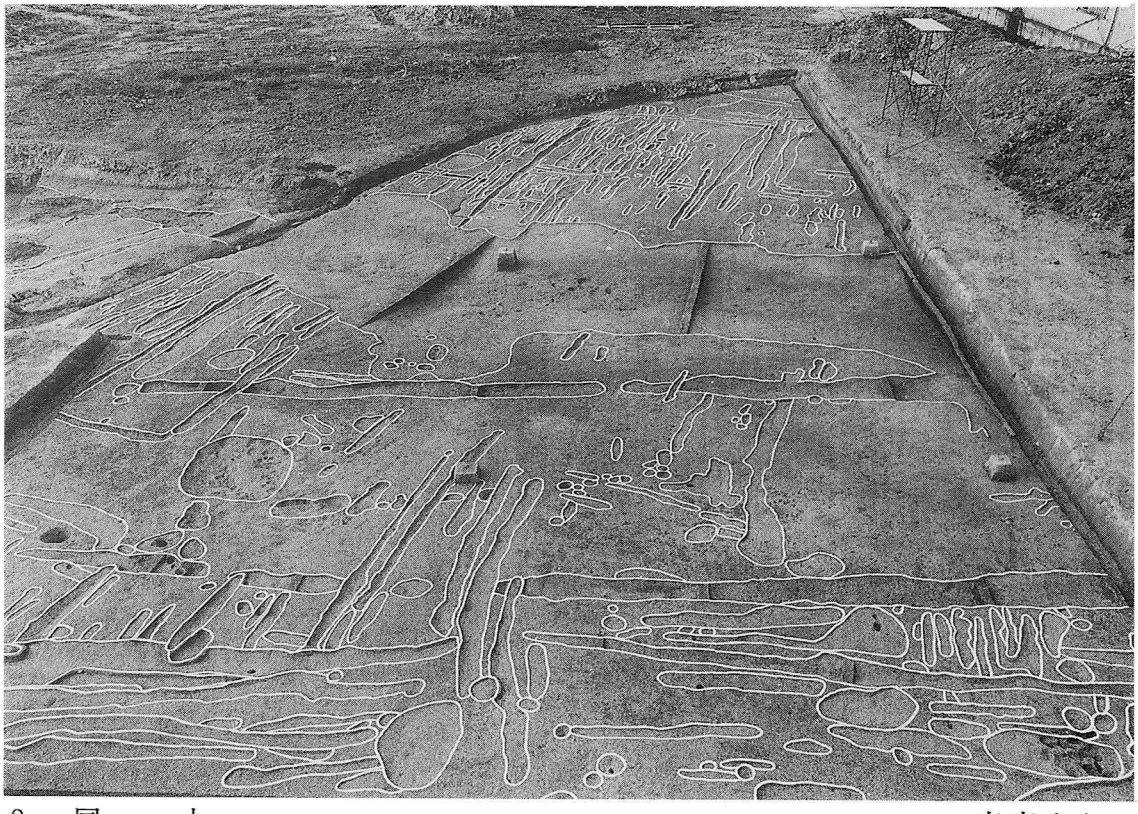


2．同　　上　　北西より

図版8　第2区遺構

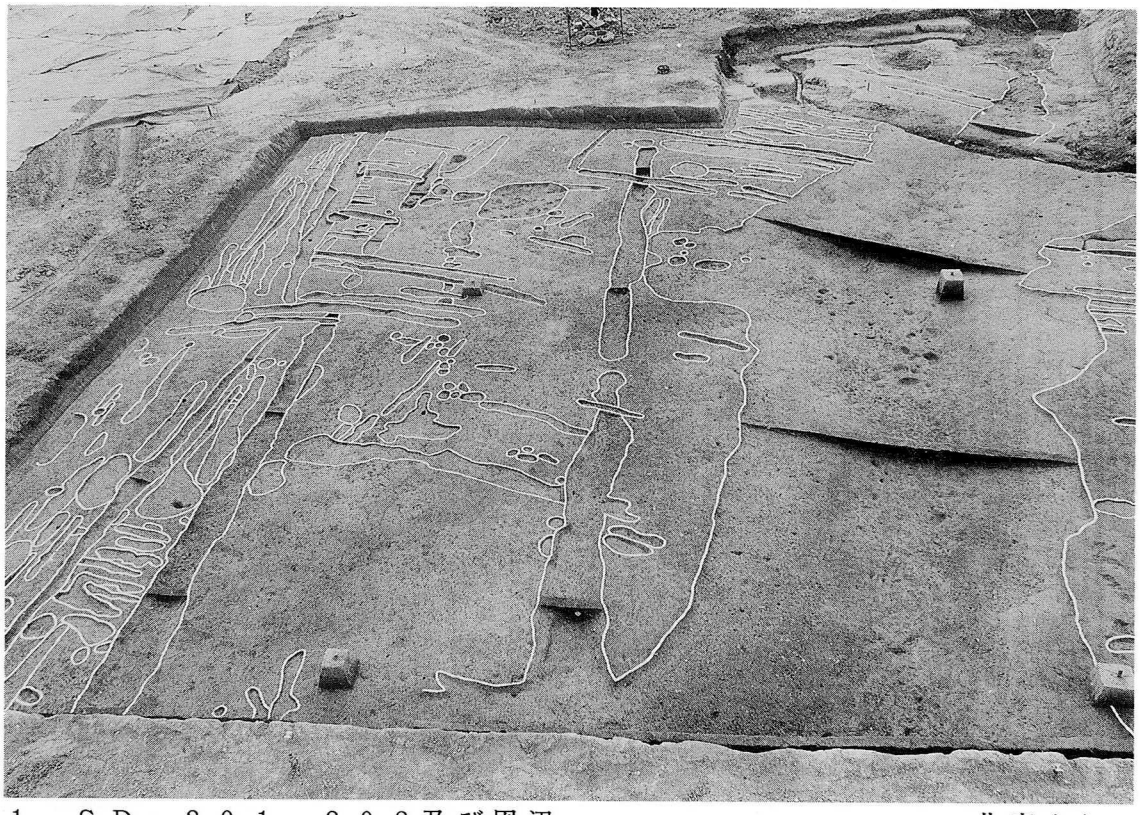


1．ＳＤ－２３８　　北東より

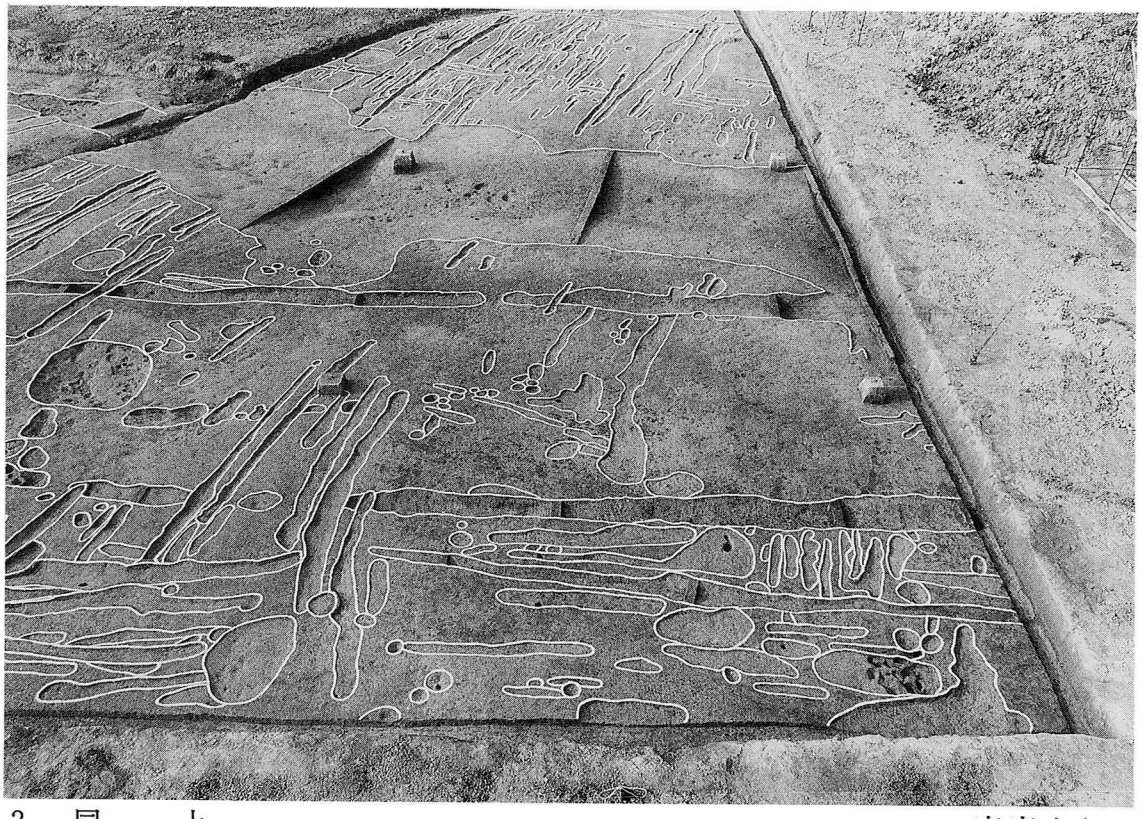


2．同　　上　　南東より

図版9　第2区遺構

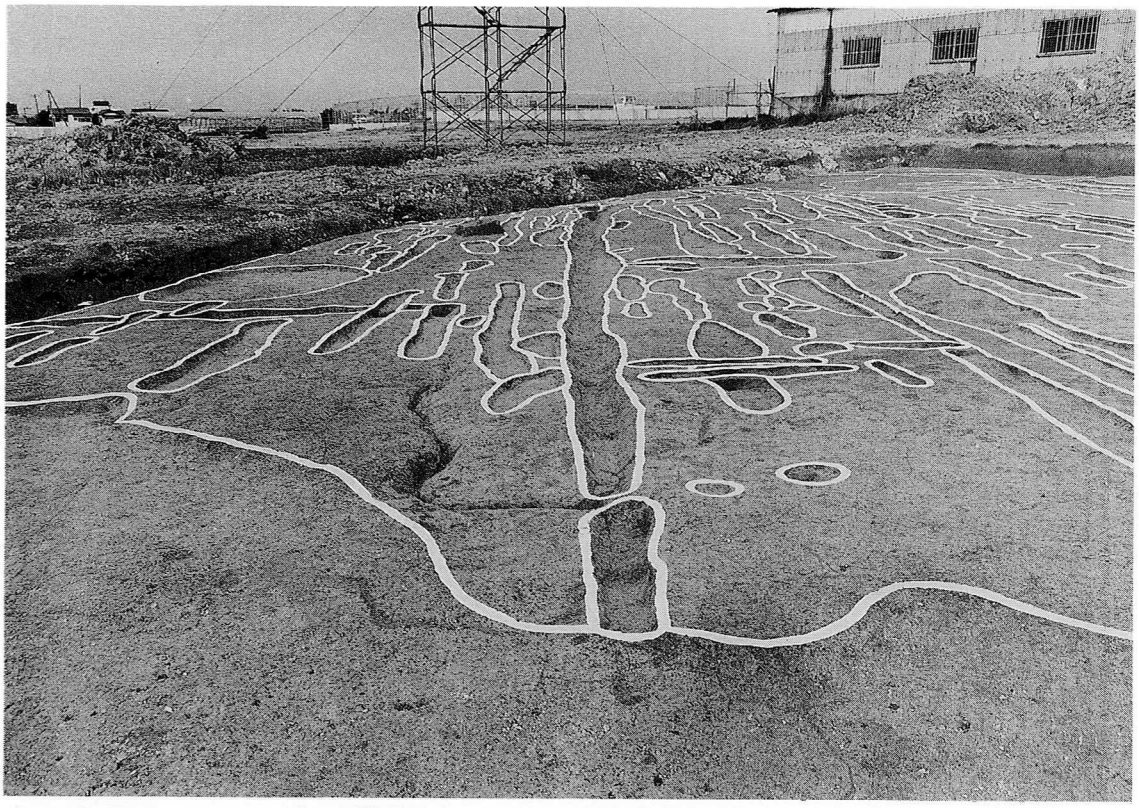


1．ＳＤ―２０１・２０２及び周辺　　北東より

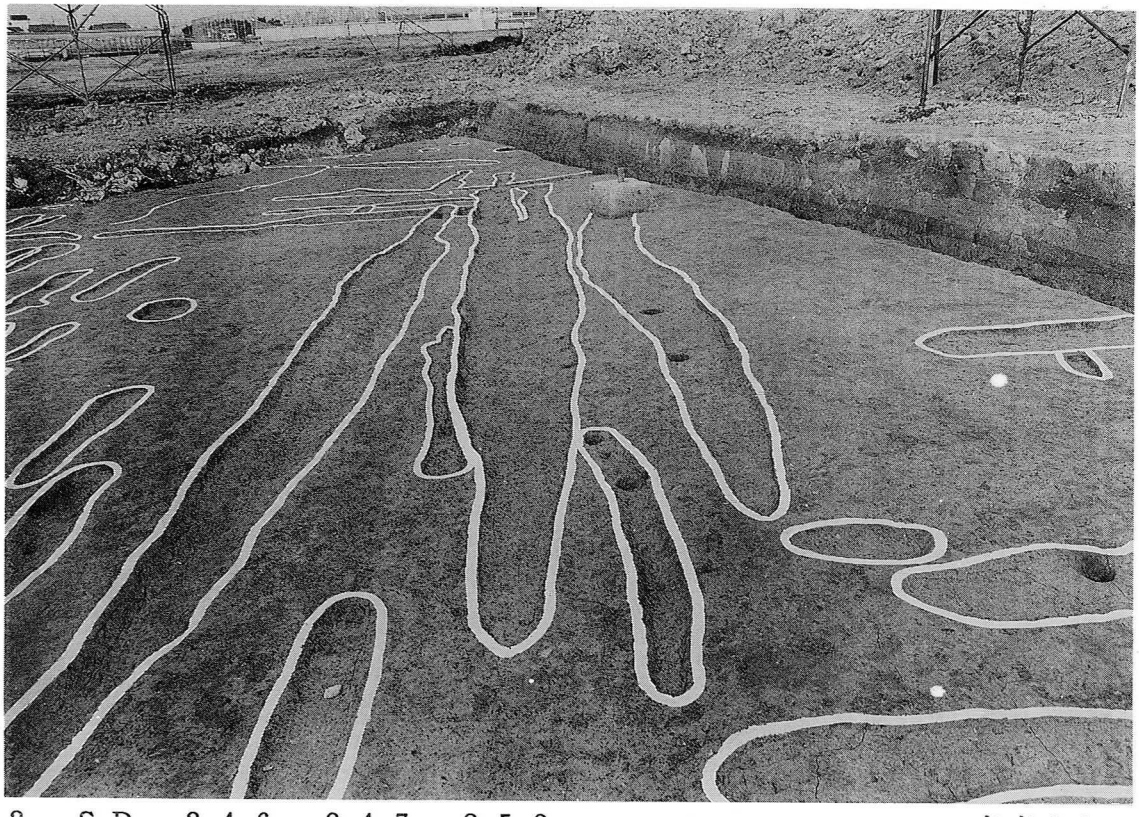


2．同　　上　　南東より

図版10　第2区遺構

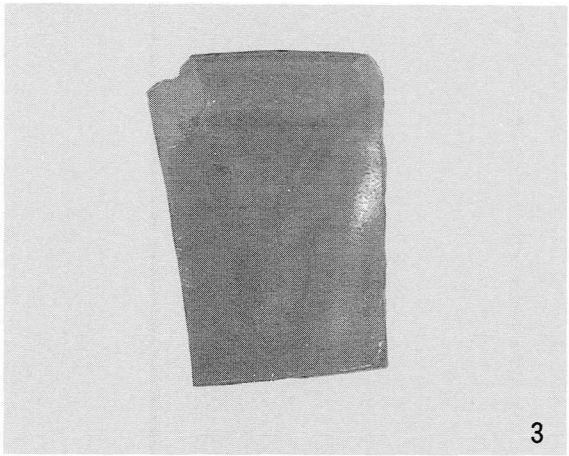


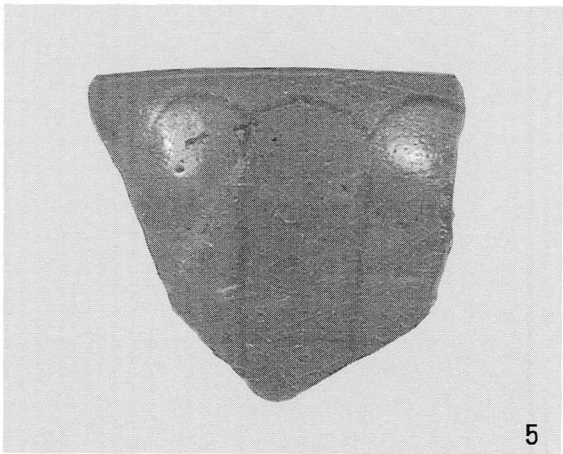
1．ＳＤ－２４１及び周辺　　南東より

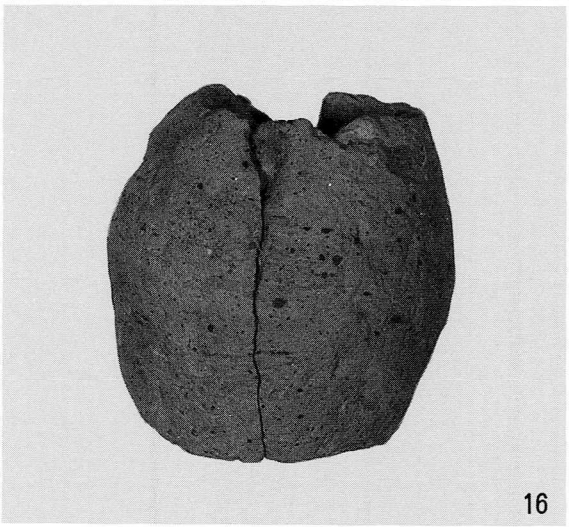


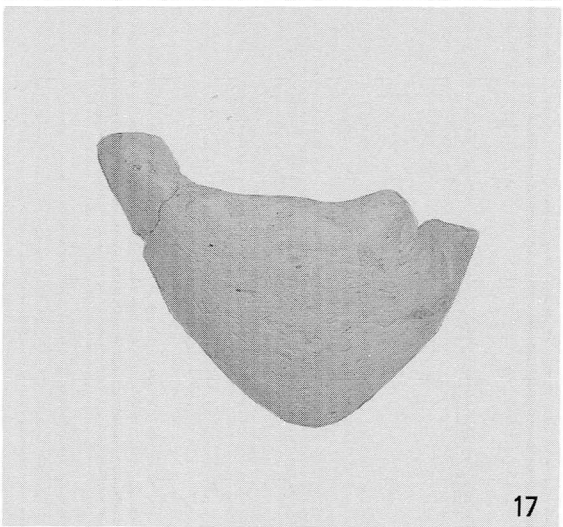
2．ＳＤ－２４６・２４７・２５２　　南東より

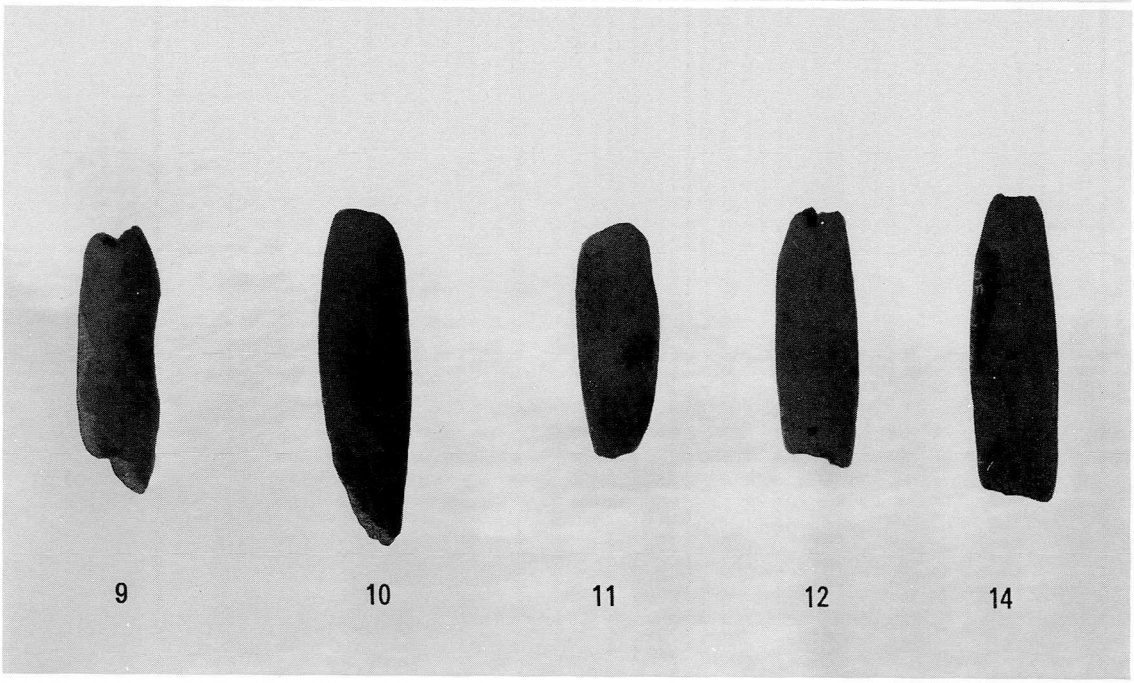
図版11　第1区出土遺物



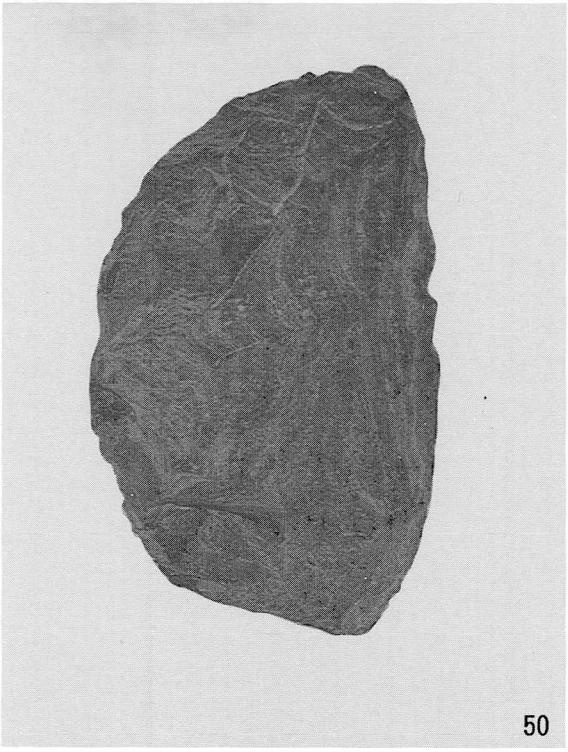


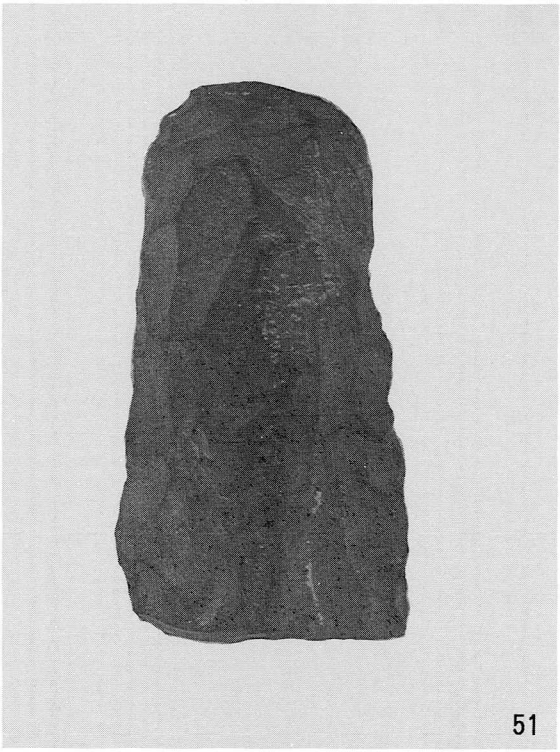


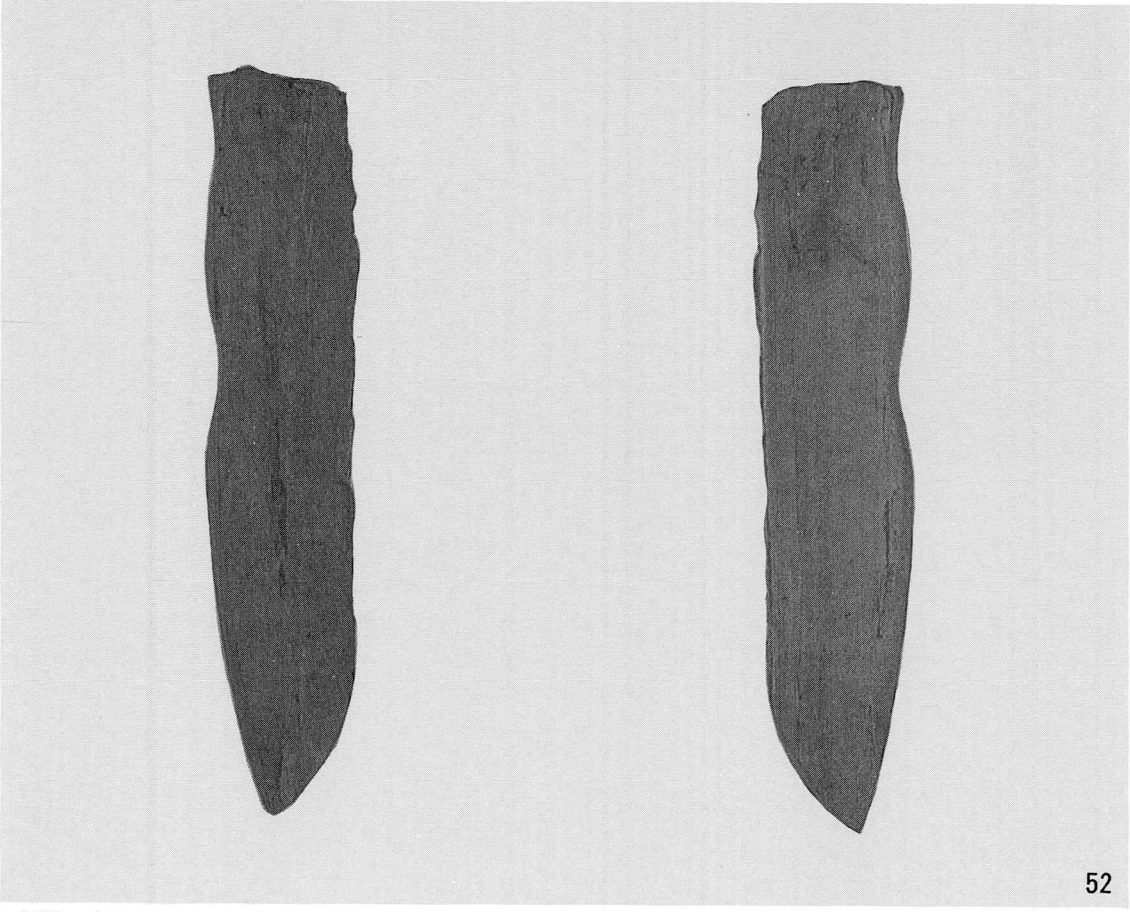




青磁（3・5）漁撈具（9～12、14、16、17）

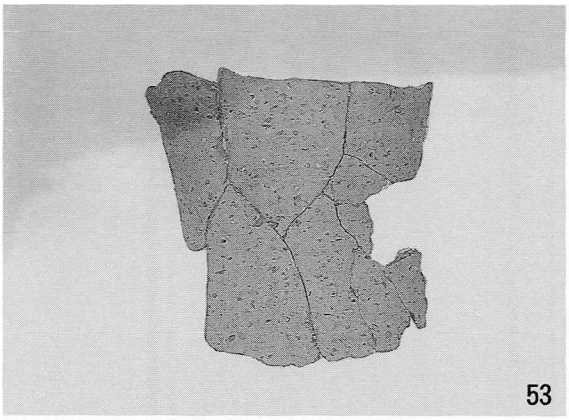


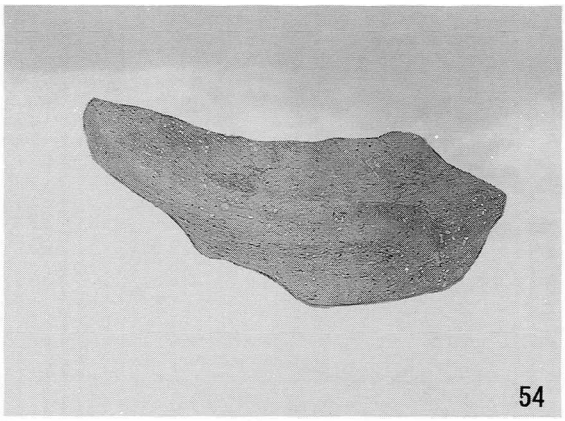


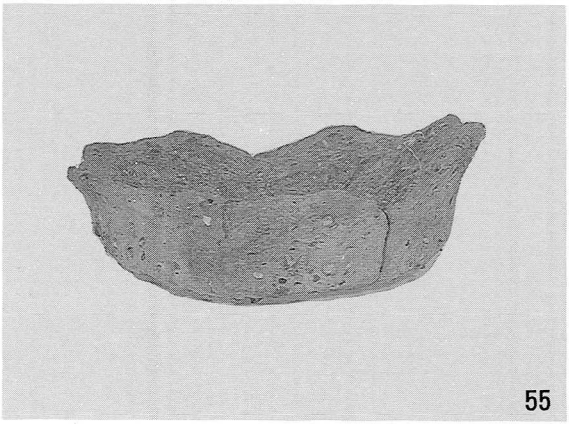


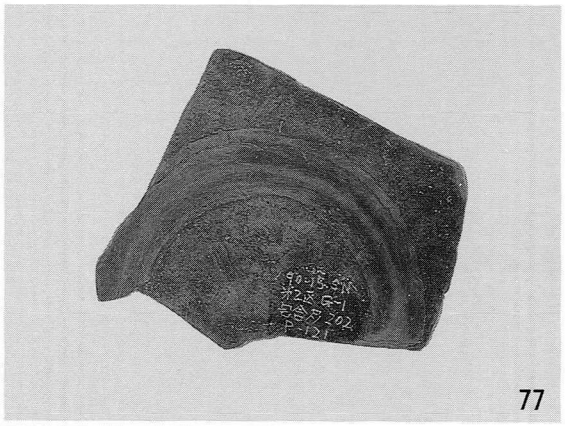
石器（50、51、52）

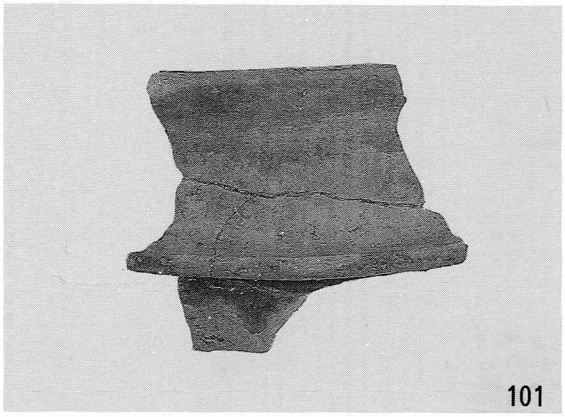
図版13　第2区出土遺物

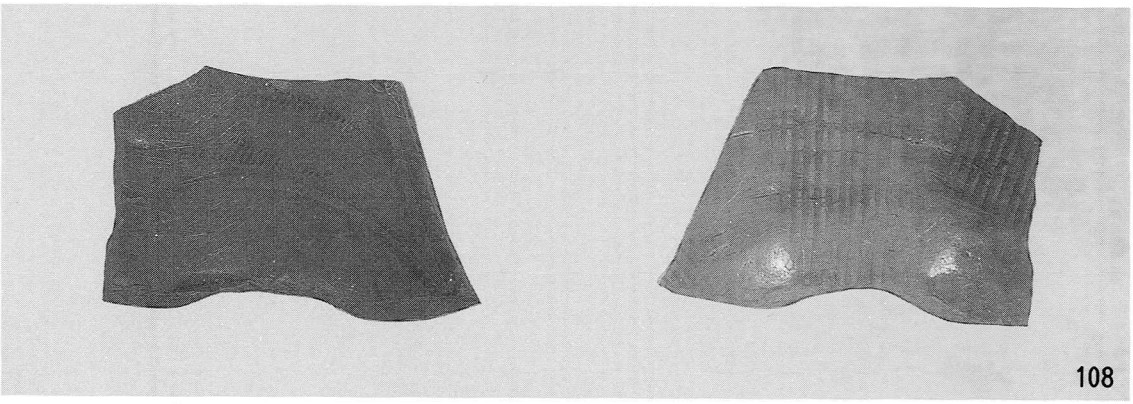






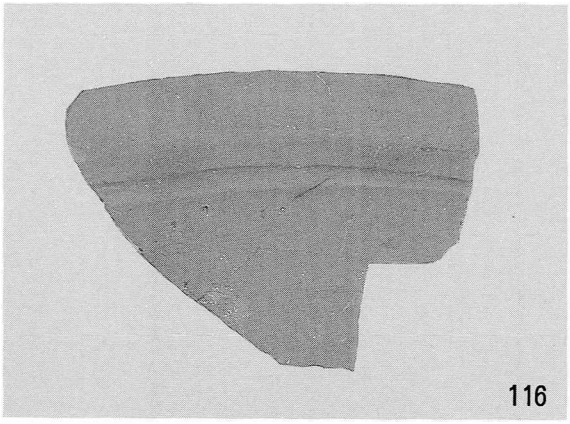


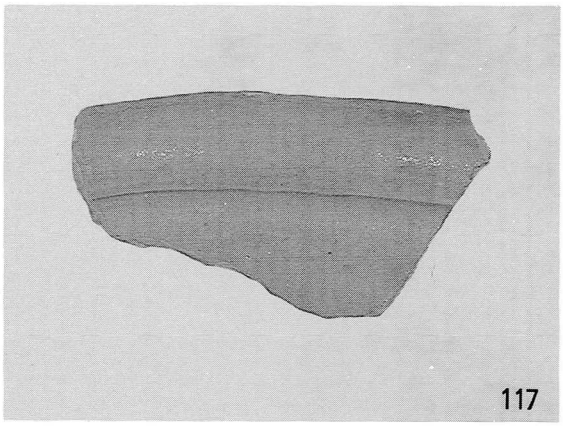


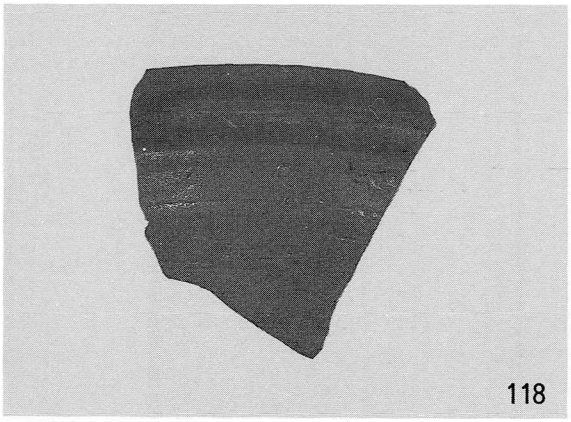


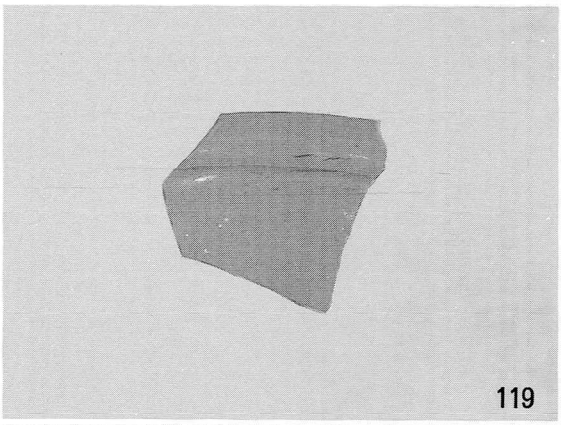
ＳＤ－238（53～55）、包含層第３層（77、101、108）

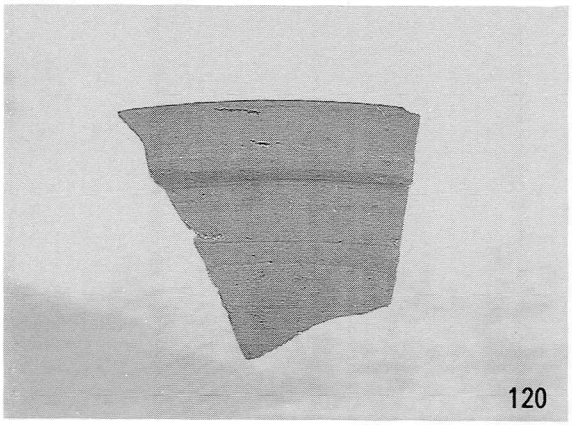
図版14　第2区出土遺物

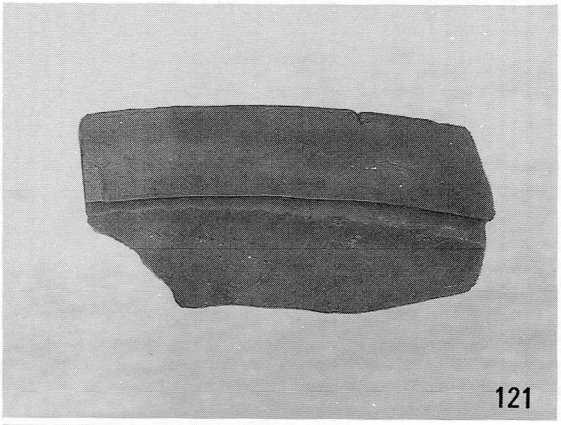


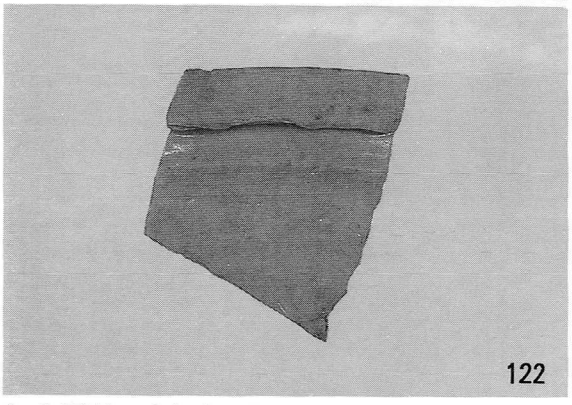


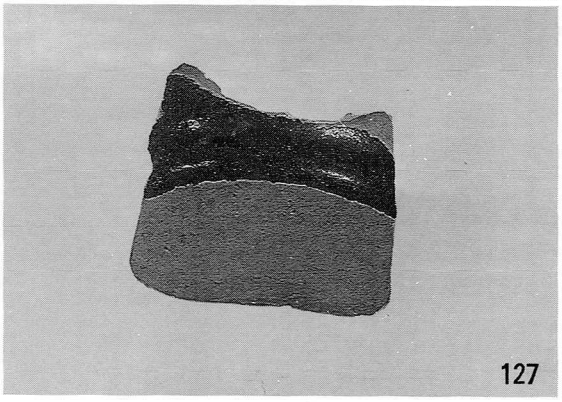












包含層第4層（119）、包含層第3層（116～118、121、122）、機械掘削時（120、127）

貝塚市埋蔵文化財調査報告　第23集

沢西遺跡発掘調査概要

発 行 日　平成4年3月31日

編集・発行　貝塚市教育委員会

貝塚市畠中1丁目17番1号

印　　刷　摂 河 泉 文 庫（貝塚市北町20—18）